

九大広報

KYUSHU UNIVERSITY CAMPUS MAGAZINE

vol. **78**
2011.11

2011
九州大学
100年



インタビューシリーズ・九大人

舩本 美和

株式会社DNPアートコミュニケーションズ
ソリューション開発グループリーダー

久永 一郎

大日本印刷株式会社
インタラクティブメディア&スペース企画開発グループリーダー

ふろんとランナー

橋彌 和秀

人間環境学研究院 准教授





- 2 「最先端有機光エレクトロニクス研究棟」が完成
- 3 インタビューシリーズ・九大人
舂本 美和 [株式会社DNPアートコミュニケーションズ]
久永 一郎 [大日本印刷株式会社]
- 7 シリーズ研究・ふろんとランナー
橋彌 和秀 [人間環境学研究院 准教授]
- 11 新しい挑戦者たち
川並 洋司 [理学府 修士課程2年]
- 13 特集・九州大学カリフォルニアオフィス便り
(CAオフィス所長 松尾正人)
- 17 大学講堂を寄附
- 19 九州大学百周年記念事業〈18〉
- 20 創立百周年記念 第3回QUウォーク開催
創立百周年記念 京都賞シンポジウムを開催
- 21 写真で見る「九大百年」展
九大百年記念グッズのご案内
- 22 秋の叙勲、2011年度仁科記念賞
- 23 同窓会だより
 - 九州大学福岡同窓会 第1回九大アラムナイ・フェス
 - 歯学部同窓会
 - 法学部同窓会
 - 筑後地区九大同窓会
- 25 稲田の除塩プロジェクト (理学部4年 早川方樹)
- 27 TOPICS
 - 九州大学テニユアトラック制について
- 28 Kyudai NEWS
 - 2011年度伊藤賞の受賞者が決定
 - WPIプログラム6拠点合同シンポジウム
 - 伊都祭2011
 - ホームカミングデー2011
 - 第64回九大祭/第8回芸工祭
 - 九州大学の統合移転事業について
- 31 ようこそ九州大学へ
- 32 九大生が案内する世界のキャンパス —— シェフィールド大学(イギリス)
- 33 躍動・学生たちの活躍 —— 九州大学体操部
- 35 新聞で報道された九州大学 平成23年8月~9月
- 37 平成23年度九州大学研究活動表彰 受賞者一覧
- 38 告知板
 - 東京・関西賀詞交歓会
 - 九州大学男声合唱団コールアカデミー 第56回定期演奏会のお知らせ
- 38 編集後記

編集発行 九州大学広報専門委員会

事務 九州大学総務部広報室
住所 〒812-8581
福岡市東区箱崎6-10-1
電話 092-642-2106
FAX 092-642-2113
E-mail koho@jimu.kyushu-u.ac.jp
URL http://www.kyushu-u.ac.jp

印刷 株式会社 DNP西日本
編集協力 丸善株式会社
株式会社 千年市場
花元ゆかり(デザイン編集)
入江修(カメラ)
永井直美(取材)

- お読みになってのご感想やご意見をお待ちしています。
- 投稿をお受けします。文字数は、300文字未満。手書きのものも受け付けますが、できればメールでお送りください。可能な限り掲載しますが、本誌の目的や性格に照らして不相当と思われる原稿は掲載しません。
- 本誌記事を転載する場合は、事前に九州大学広報室までご連絡願います。
- 「九大広報」は九州大学 Web サイトでもお読みいただくことができます。
- 次号は、2012年1月発行予定です。

次世代有機ELデバイスの研究拠点 「最先端有機光エレクトロニクス研究棟」が完成



テープカットの様子

できました。
た研究開発に取り組
デバイスの実現に向け
で、次世代の有機EL
など約20機関と共同
はじめ、他大学や企業
科学技術研究所をは
ことにより、平成22
年4月に設置され、
これまで(財)九州先端

伊都キャンパスに「九州大学最先端有機光エレクトロニクス研究センター(OPERA)」の研究開発拠点となる施設、「最先端有機光エレクトロニクス研究棟」が竣工し、平成23年10月5日(水)に開所式典が執り行われました。
OPERAは平成21年度に全国で30課題が採択された世界最先端の研究開発を支援する内閣府の「最先端研究開発支援プログラム(FIRST)」に、安達千波矢教授の研究課題「スーパー有機ELデバイスとその革新的材料への挑戦」が採択されたことにより、平成22年4月に設置され、

り、有川節夫総長からは、「大学としても全力を挙げて本センターの運営を支援したい、関係の皆様のご支援を賜りたい」との挨拶がありました。
その後、奥村直樹総合科学技術会議議員、戸渡速志文部科学省大臣官房審議官、師田晃彦経済産業省商務情報政策局デバイス産業戦略室長、牛尾長生福岡県副知事、高島宗一郎福岡市長からの祝辞の後、大竹桂一パナソニック

学内外の関係者約200人が出席した式典では、安達センター長から「センター発足後、着実に研究成果が出ている中、新たに完成した研究棟で研究者間の議論を行い、研究を進め、有機ELの産業化に向けた世界的な研究拠点を形成していきたい」との挨拶があり、有川節夫総長からは、「大学として全力を挙げて本センターの運営を支援したい、関係の皆様のご支援を賜りたい」との挨拶がありました。



内覧会で説明する安達センター長(左より二人目)



研究棟1階吹き抜けエントランスに設置された大型有機ELディスプレイ

株式会社理事／映像デバイス開発センター所長による「有機エレクトロニクスが拓く未来」と題した記念講演も行われ、式典終了後には、テープカット、研究棟の内覧会が執り行われました。
このたびの研究棟の竣工により、我が国の有機光エレクトロニクス分野の研究分野を先導してきた九州大学での同分野の教育研究の更なる充実・加速が期待されます。



インタビューシリーズ

九大人

2011.7.29 interview



聞き手

田中冴季

たなか さき

芸術工学部

工業設計学科4年

舛本さん・久永さんのお二人とも、九州芸術工科大学のご出身です。卒業後は、大日本印刷株式会社に入社され、現在は、フランスのルーヴル美術館との共同プロジェクトに携わっていらっしゃいます。このプロジェクトでは、マルチメディアを駆使した新たな展示方法を開発。フランスのルーヴル美術館に常設の展示紹介が登場しています。今回は、お二人の大学時代の研究のことや、ルーヴル美術館との共同プロジェクトのお話など、芸術工学部工業設計学科の田中冴季さんがお話を伺いました。

このインタビューは平成23年7月29日 大日本印刷株式会社 五反田ビルにて行いました。

舛本 美和氏 PROFILE

昭和63年3月九州芸術工科大学 画像設計学科卒業後、大日本印刷株式会社入社。主な受賞歴はハイビジョン・アワード'92選定委員長賞、MMAグランプリ'95ハイビジョン部門静止画作品賞、第一回デジタルアーカイブアワード'00など。

株式会社DNPアートコミュニケーションズ
企画開発部 ソリューション開発グループリーダー

舛本 美和

ますもと みわ

大日本印刷株式会社 C&I事業部
第一トータルソリューション本部
インタラクティブメディア&スペース企画開発グループリーダー

久永 一郎

ひさなが いちろう

久永 一郎氏 PROFILE

平成3年3月九州芸術工科大学 工業設計学科卒業後、大日本印刷株式会社入社。主な受賞歴はディスプレイデザイン協会ディスプレイデザイン大賞(朝日新聞社賞)'96など。

世界と闘う覚悟を持って、 社会に出よう。

新人の時から芸術工学を 活かした仕事に携わる。

—お二人は大学時代、どのようなことを研究されていたのですか。

舛本 私は画像設計学科の15期生で、視覚心理学を専攻しました。卒業研究は、「錯視の中の仮現運動」をテーマに、仮現運動における知覚の優位性が、形なのか色なのかといったことを研究していましたね。でも、大学4年間を通して、デザインから、印刷、写真、映像までいろんなことを勉強しました。当時、漠然と理解していた知識も、会社に入って実践で活用するようになった、「これってこういうことだったのか」と気付かされるのがたくさんありましたよ。

久永 私は工業設計学科で、インテリゲンデザインと人間工学を専門に勉強していましたが、音響設計や画像設計など、授業はたくさん受けていましたね。取得できた単位は少なかつたんですけど(笑)。振り返ると、基礎的なことをしっかり教えてもらったと思います。例えば、コンピュータの分野は凄いスピードで進歩していますが、CGを描く時、ブル代数の計算式を知っていれば、構造は変わらないのでほとんどのCGの描き方がわかるんです。

本質的なことは、時が経っても変わりませんからね。

—大学時代に勉強したことで、仕事で役に立っていることって何でしょう。

舛本 私の場合、印刷会社に入りましたが、印刷メディアはほとんど扱わないセクションに配属されたんです。当時は、ハイビジョンが世に出たばかり。高精細の印刷データを映像に変換するというのが最初の仕事で、大学でやってきたことに比較的近いものでした。それが現在まで続いている感じですね。今は、自分の手を動かして作ることはありませんが、制作プロセスを理解しないとプランニングもできません。ですから、大学で学んできたことは、今の仕事で大いに活かされています。

久永 私は、人間工学的な見地から、人間中心の考え方を習得できたことが一番役に立っています。どんなに優れたものを作っても、人間が理解でき、使えなければ意味がありません。仕事を何を作るにしても、まず、人にとってどうなのかということを考えるようにしています。また、一般的には、入社から数年経って実力が覚えてきた頃から面白い仕事にチャレンジさせてもらえると思うのですが、我々のよ



ルーヴル美術館にも設置され始めています。このような実績を重ねることで、日本の美術館にも私たちの技術を理解してもらえればと思っています。このプロジェクトの技術が美術館や博物館に導入され、広く一般の人たちにも使ってもらえるようになれば、社会の役に立っていることをもつと実感できるでしょうね。情報の押しつけではなく、作品と対話するきっかけを作ることができればと考えています。

久永 苦勞と言え、ルーヴル美術館の関係者とのコミュニケーションも大変でしたね。やはり日本人とフランス人では教育も文化も違うので、お互いを知るまでに時間がかかりました。慣れてきました、今も毎日とても長いテレビ会議をしています。しかし、学ばせてもらうことも多いです。貴重な経験をさせてもらっていると嬉しいです。



パリ・ルーヴル美術館に設置された鑑賞システム

ルーヴル美術館と共同で、絵画の新しい展示を企画。

— お二人が進めていらっしゃるルーヴル美術館のプロジェクトは、どのようなことをされているのですか。

舂本 ルーヴル美術館には30万点を超える膨大な所蔵品があります。その中から選ばれた数点の作品を展示し、マルチメディア技術を使って情報提供をしているんです。10月からはじまった展示で8回目になります。現在、主要なプロジェクトメンバーは約30名。久永はプロジェクトマネージャーとして動いていて、私は具体的なコンテンツ開発に携わっています。

— このプロジェクトには、芸工大出身の方が多く関わっていらつしやると聞きましたが、お二人はどんな経緯で関わるようになったのでしょうか。

久永 まずこの仕事が弊社にきた経緯ですが、ルーヴル美術館長のアンリ・ロワレット氏からの依頼でした。背景には、フランスの若者の美術館離れがあったようです。それを止めるためにルーヴル美術館は、国から美術館教育を改革するように言われていたのです。それでロワレット館長は、ルーヴルが21世紀の新たな美術館に変わるために

大学時代に視野を広げ、自分の基盤を築いておくこと。

— 私も、このプロジェクトに被験者として関わらせてもらったのですが、仕事を通じて、同じ大学の卒業生や在學生と関わりを持つことをどのように思われますか。

久永 他の大学にない特色や圧倒的な実力を示せなければ、母校であっても協力を頼むことはできません。つながりがあるからという理由だけで頼むと、社会人としての品格を疑われます。九大に共同研究をお願いしたのは、必ず結果を出してくれるという確信があったからです。個人的には、九大の現役の学生さんとのリレーションは、もつと大事にしたいと思っています。デザインの研究などは新しい発想が必要ですし、もつとコラボレーションをやるべきだと思いますよ。

— 最後に、現役の九大人にどんなことを望まれますか。

久永 インターネットが発達して、今はとても簡単に世界とつながります。そういう意味では、地方大学という概念はなくなりました。その反面、競争は大変ですよ。私たちの時代は、福岡のどこかに格付けされていました。今は世界のどこかに格付けされ

必要なパートナーを世界中で探していました。そこにヒットしたのが、日本の大日本印刷だったというわけです。

舂本 プロジェクトは、2006年からスタートしましたが、動き出したのは2005年です。当初は私たちを含む5人のメンバーが各部署から集められました。でも最初は、何をしたらいいのか全くわからなかったんですよ。その後、少しずつやるべきことが見えてきて、それに必要なスキルを持った人を募っていったら、自然に芸工大出身者が集まったんです。

— プロジェクトを進める上でどんなことに苦労されていますか。

久永 マルチメディアの功罪とも言いですが、映画と絵画と並んでいけば映画の方がおもしろいですよね。どうしても眼がメディアの方を追ってしまつて、本当に見てほしい絵画はなかなか



す。70億人を相手にするわけだから、社会に出た時点で世界と闘う覚悟が必要でしょう。海外の学生と話す機会もあります。彼らは本心に積極的です。自分が今どのレベルにあつて、どこで何を實現するのか、グローバルに考えようとしています。九大の学生の皆さんにもそうあつてほしいですね。大学時代に、将来、誰を相手にするのか、自分の視野を広げておくことも大切だと思いますよ。

舂本 社会に出ると、イレギュラーなことがたくさんあります。そんな時、自分が立ち戻る場所というか、ベースになるものを持っていると強いんです。大学の時は、目の前のことで精一杯でしょうが、後からわかることもたくさんあるはず。社会に出たら楽しいですよ。ぜひ、大学時代に自分のベースに



見てもらえない。それはなぜなのかを考えさせられる日々です。

マルチメディアは情報が多いし表現も豊かにできます。AとBの関係は、一本の線を引いてあげるだけですぐにわからせることができます。でも、わかりやすいだけでは美術鑑賞に真に役に立っているとは言えないんです。一度は線を引いてあげても、その次からは絵と絵の関係を自分で線を引けるようになってもらわなければならぬ。その加減が難しいんですよ。

舂本 私は、他の美術館や博物館の仕事もしていますが、従来型の映像番組やデータベースの域から一歩先に踏み出してもらえないことが多いんです。私たちが手掛けている展示企画は、年間850万人の人が訪れるパリの

なるものを築いて、世界と闘える力を養ってください。



ルーヴル-DNPミュージアムラボ
第8回展のお知らせ

LOUVRE-DNP MUSEUM LAB

来世のための供物展
古代エジプト美術から読み解く
永遠の生への思い

今回の展示では、古代エジプト人の葬礼に関する考え方を現代に伝えています。会場では、王家に仕えたサケルティという高官のためのステラ(石碑)を中心に紹介。独自に開発した映像装置を使って、供物を奉納する儀式に参加するなどの体験ができるということです。

【会期】2011年10月8日(土)~2012年3月4日(日)
【開館時間】金/18:00~21:00
土・日/10:00~18:00

【料 金】観覧無料、予約制

【会場】ルーヴル-DNP ミュージアムラボ
東京都品川区西五反田3-5-20 DNP五反田ビル1F

内務の長サケルティのステラ
紀元前1970年~紀元前1900年頃/石灰岩、彩色
ルーヴル美術館、古代エジプト美術部門
©2011 Musée du Louvre/Christian Décamps

100年後も残る

研究に取り組みたい。

「ふろんとランナー」は、九州大学の研究の最前線をインタビューで紹介するシリーズです。シリーズ第29回目は、人間環境学研究院の橋彌和秀准教授に、歯学研究院の都留寛治准教授が聞きます。



「赤ちゃん研究員」システムを導入し、乳幼児期のコミュニケーション発達を幅広く研究。

橋 彌 和 秀

人間環境学研究院 准教授

はしや かずひで

聞き手 歯学研究院 都留 寛治 准教授

赤ちゃんと研究をとおして、社会的認知の発達と進化に迫る。

都留 先生は、赤ちゃんを対象に幅広い研究を進めていらっしゃいますが、現在は主にどのような研究をされているのですか。

橋 彌 赤ちゃんや子どもさんのコミュニケーションと、その基盤となる社会的認知の発達を中心に研究しています。我々のコミュニケーションは、ことばだけでなく、相手の話にうなずいたり、視線を合わせた外したりと、日常意識することのないさまざまな「約束ごと」の上に成り立っています。これらの約束ごとやそれを可能にするメカニズムを知ることが、それによって成り立つヒトの社会を考える上で不可欠です。文化や社会に含まれる多様な情報を子どもたちが発達の過程でどのように取り込んでいくのか、その基盤としてどのような能力が発揮されているのかを知ることが、発達とは何か、さらにはヒトとは何か、という問題に迫りたいと考えて仕事をしています。

都留 何歳くらいの子どもの対象にされているのですか。

橋 彌 現在のところは生後4ヶ月くらいから、5歳くらいまでのお子さんです。5歳という年齢は、言語やコミュニケーションなどの発達が一段落して、学童期に入っていく年齢です。でも最近、我々の研究の中でも、6歳くらいのお子さんでも驚くほど大人とは異なる反応を示す側面が分かってきたりして、学童期のお子さんにも年齢層を広げなくては考えています。

都留 研究に協力いただく「赤ちゃん研究員」というボランティア・パネル（登録制度）を作られていますね。何人ぐらいの登録があるのですか。

橋 彌 海外や、これまで研究をさせていただいていた機関のシステムを参考に、九大に着任した2003年からスタートし、現在は福岡市周辺で約900人の赤ちゃん・お父さんとお母さんの方にご登録いただいています。ずいぶん多いなど思われるかもしれませんが、お父さん、私たちが油断しているうちにすぐに育たれるので、常に募集しています。

都留 何人位の被験者数で調査をされるのですか。

橋 彌 研究にもよりますが、ひとつの条件で20人位でしょうか。条件が3つあれば60人、ということになります。赤ちゃんに来ていただくので、調査を開始しようと思ったら眠っていたり、たまたまご機嫌が悪くてぐずってしまったりということも当然ありますから、実際にはそれ以上の赤ちゃんに来ていただいています。海外の大きな研究室では、もっと

と大規模な調査で結果を出してくるところもあります。数ではかないませんが、ですから、

他でやっていないようなテーマや視点に着目し、その分研究ごとに適切な方法を工夫して研究を進めています。

都留 国の違いによっ

ても結果に影響が出るのでしょうか。

橋 彌 国というよりは、育つ環境が大きいです。赤ちゃんは、現在地球上に6000人以上いるどの言語も獲得することができる能力を持っているわけですが、同時に、言語ほどはっきりとは観察しにくい、生育環境にある「文化」も獲得していきます。そのような文化や社会環境と発達の相互作用そのものも、私たちが興味を持っているテーマです。

都留 日本以外の赤ちゃんの研究も考えていらっしゃいますか。

橋 彌 今やっている日本での研究も、自分ととって面白いですし、まずやるべきことだと思っっています。しかし、研究結果が「日本の（福岡の）子どものローカルな現象」なのか、文化を超えたさらに普遍的なものなのかは常に考えるし、実際にそれを問われることもありま。ですから、海外の仲間との共同研究も常に視野に入れていますし、アンテナは張っているつもりです。

ヒトのコミュニケーションで重要な意味を持つ「視線」。

都留 視線を使ったコミュニケーションも研究されていますね。

橋 彌 はい。「ヒトとは何か」に迫る上で私たちが重要な軸にしているのが、発達の他にもうひとつ、進化という問題です。ここ数年進めてきたもののひとつが、視線コミュニケーションの進化に関する研究です（小林洋美との共同研



究)。ヒトを含めた霊長類は社会性の動物ですが、我々は、社会性の指標となる種ごとの群れの大きさや大脳新皮質率と、目の形態（眼裂の横長さや強膜（ヒトで言う白目部分）の露出度）との関係を検討し、それぞれに高い相関があることを明らかにしました。集団内の社会関係は、個体間の競合もある一方で、ある程度の協力関係を維持しなくては群れが成り立たないという微妙なバランスの上に成り立っています。体や顔の運動でなく眼球運動のみでの情報収集を可能にする「横長で強膜の露出した目の形態」は、自分がどんな情報を得たかを他のメンバーに知られにくいため、個体間の競合関係の中で有利だった。しかし、群れサイズがさらに拡大する中で、群れを維持するコストが増加し、エネルギーコストの低い「視線」というシグナルが、社会的関係を維持する手段として機能するようになった、というのが我々の提案した「ゲイズ」

調査の様子。画面を見る生後9ヶ月の赤ちゃん。



橋彌 和秀 准教授 プロフィール

- 1992年 京都大学教育学部卒業
- 1994年 京都大学大学院理学研究科 修士課程 修了
- 1994年 日本学術振興会特別研究員 DC1 (京都大学霊長類研究所)
- 1997年 京都大学大学院理学研究科 博士後期課程 研究指導認定 退学
- 1997年 日本学術振興会特別研究員 PD (東京大学大学院医学系研究科)
- 1998年 博士 (理学) 京都大学
- 2000年 京都大学大学院教育学研究科 助手
- 2003年 九州大学大学院人間環境学研究院 助教授
- 2007年 現職



「『褒美』に限らない、視線を含めると、ガラスの向こうの女性が赤ちゃんと視線を合わせている場合だけでなく、3分間の調査時間内で、赤ちゃんの紐引き回数が時間とともに増加していることがわかりました。生まれて半年の赤ちゃんが「大人と視線が合う」ことを報酬として学習を行うことが示されたのです。物質的な

グルーミング（視線による毛づくろい）」仮説です。1997年に共同研究者の小林らによって始めて報告されたことですが、霊長類の中で「白目」があるのはヒトだけです。白目があることによって、ヒトの視線のグルーミング機能は大幅に上昇し、社会的コミュニケーションツールとして重要な意味を持つようになったのではないかと考えています。

一方で、このようなヒトの視線の機能が、赤ちゃんの発達の中でどのような意味を持つのか、ということについても検討しました（坂口晋一・小林との共同研究）。幼児は、そうすればお腹がいっぱいになるわけでもないのに「見てもらう」（注目される）のが大好きです。我々は、まだことばの話せない赤ちゃんでも同じようなことが起こっているのかを知るために、生後5



6ヶ月の赤ちゃんが紐を引っ張ると目の前の特殊なガラスが数秒間だけ透明になり、女性が表れて赤ちゃんにあやしかける、という装置を作りました。色々な条件で検討してみると、ガラスの向こうの女性が赤ちゃんと視線を合わせている場合だけでなく、3分間の調査時間内で、赤ちゃんの紐引き回数が時間とともに増加していることがわかりました。生まれて半年の赤ちゃんが「大人と視線が合う」ことを報酬として学習を行うことが示されたのです。物質的な

「褒美」に限らない、視線を含めると、ガラスの向こうの女性が赤ちゃんと視線を合わせている場合だけでなく、3分間の調査時間内で、赤ちゃんの紐引き回数が時間とともに増加していることがわかりました。生まれて半年の赤ちゃんが「大人と視線が合う」ことを報酬として学習を行うことが示されたのです。物質的な

持ってもらえたようです。

都留 チンパンジーの赤ちゃんの研究が、ヒトの赤ちゃんの研究に役立ったことなどありましたか。

橋彌 ヒトとチンパンジーとは約600万年前に分岐したと考えられています。「ヒトのコアな特徴とは何か」を知る上では、ヒトの発達を知ると同時に、チンパンジーのように近縁な種を含めた、ヒト以外の動物との比較も不可欠です。また調査の方法論としても、ことばをしゃべることができない赤ちゃんのこころや行動について知るためのテクニクとしては、ヒト以外の動物での研究についてきちんと知っておくことも有効だと思っています。

「無駄のなかに宝がある。」

都留 今後はどのように研究を展開していきますかと考えられていますか。

橋彌 ヒトの知性やこころの起源ということに

んは協和音を好むことが知られていましたが、これはヒトだけの特徴なのではないかという議論が主流でした。そうではない、ということを示した研究でしたので、国内外の報道はじめ、いろいろな方に興味を

関して20世紀の研究は、集団の中で相手を出し抜いたり騙したりという、競争的関係に適應する文脈で知性（マキャベリの知性）を捉えようとしてきました。しかし、このような知性は多くの社会性動物でも確認されはじめ、どうもヒトの専売特許ではないことがはつきりしてきました。では、ヒトの特徴はどこにあるのかという議論の中でここ10年くらい、ヒトが発達の初期から見せる「共感」や「協力しよう傾向」、に着目して社会性や規範の成立にアプローチしようとする動きが出てきています。まだ始まったばかりで、考えるべきこともやるべきことも山積みです。我々は、ともすれば、ヒトの発達のゴールを「合理的」で「理性的」な知性に置きがちですが、感情や「非合理的な思い込み」が社会を回している側面もあります。発達研究を通じて、ヒトのこころの成立過程について、新しい事実を提示していきたいと思っています。自分が100年近く前の論文を読んで「すごいこと考えてたんだなあ」と感動するように、100年後の誰かに、「こんな時代にこんなことをやってたのか！」と驚いてもらえるような、古びない研究をやりたいと思っています。

都留 最後に学生の皆さんへのメッセージをお願いします。

橋彌 理系とか文系とか細かいことにとらわれずに、ぜひ確信を持って「逸脱」してください。「無駄の中に宝がある」という勝新太郎さんの言葉が好きなんですが、恋愛でもサークルでも無駄なものはない。芸人さんや作家さ

チンパンジーの赤ちゃんも協和音楽を好むことを報告

都留 ところで先生は、ヒトだけでなく、チンパンジーの研究もされていますよね。

橋彌 はい。私の博士論文のテーマも「チンパンジーの視聴覚認知」でした。九州大学にはチンパンジーはいませんが、数年前に、北九州の「到津の森公園」で生まれたチンパンジーの赤ちゃんをスタッフの方が人工飼育せざるをえないことになり、「この機会に何か研究をしないか」と誘っていただいたのです。限られた貴重な機会に何ができるか急いで検討した結果、チンパンジーの赤ちゃんが協和音楽と不協和音楽のどちらを好むかという実験を行いました（杉本啓・小林・延吉紀奉・桐山泰志・竹下秀子・中村知靖との共同研究。実験方法としては、先ほどお話しした視線の実験と似ていますが、チンパンジーが紐を引けば音楽が流れ、一定時間内に紐を引き続けられ同じ曲が流れ続けるが、しばらく引かないでおいてから引けば別の曲に変わる、という装置を作りました。オリジナルの協和音楽と、一部を変更して不協和に変えたものとをペアにして、6セッションの実験を行いました。生後5ヶ月のチンパンジーの赤ちゃんが一貫して協和音楽を長く再生したんです。ヒトの赤ちゃん



チンパンジー乳児の実験装置 (Sugimoto, et.al.2010)

んと一緒に、そういうことをすべて「肥やし」にできるのが、ヒトを相手にした研究の面白いところです。大学は知を消費するところではなく、知を生産するところです。その自覚と覚悟を持って、本当にやりたいことを楽しむ人たちと一緒に研究したいと思っています。



左から都留准教授、橋彌准教授

赤ちゃん研究員の募集

人間環境学研究院・発達心理学研究室では、ことばやコミュニケーションの発達調査にご協力いただける「赤ちゃん研究員」(0歳のお子さんと保護者の方)を募集しています。詳細をお知りになりたい方、興味をお持ちになられた方は、ぜひお気軽にご連絡ください。

【連絡先】
Webサイト
九州大学 赤ちゃん研究員で 検索
E-mail: babykyushu@yahoo.co.jp



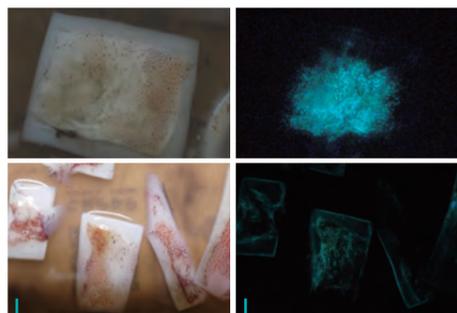
臨床や研究に 役立つ分析機器を 開発したい。



理学府 修士課程2年
川並 洋司 Yoji Kawanami さん

九州大学で学び、目指す分野を究めようとする次世代のプロフェッショナルを紹介します。今回は、高分子膜修飾電極によるバクテリアルシフェラーゼ発光反応の効率化の研究で、2つの賞を受賞した若き研究者の登場です。

いずれも「イカの切り身に繁殖したバクテリアの発光」の様子を写したものです。



イカの切り身を明るい場所（左）で撮影したもの
同じものを暗闇で撮影したもの

バクテリアは肉眼では確認できないので、当然、明るい場合（左）には写りませんが、発光をしているので、暗闇（右）ではその存在を確認することができます。



理学研究院
たけはら こう
竹原 公 准教授

社会に出ても研究に対する熱意を持ち続けてほしい。

川並君は2つの賞を受賞しましたが、どちらも学会の発表に対する賞です。ですから、研究内容はもちろん、プレゼンテーション能力、質疑応答の答え方なども含めて評価されます。彼は、自分がどのように考え研究を進めてきたか、非常にわかりやすくプレゼンテーションできていました。質問にも的確に答えられていて上出来でしたね。自分で考えることを苦手とする学生が多いなかで、彼は自分で考えて行動する能力を持って

ます。また、研究者は、うまくいっている時でも、何が良く何が悪いのか、客観的に見る能力が必要なのですが、彼はそのあたりのバランス感覚が非常に優れています。人とのコミュニケーションも上手ですね。私が放任主義的なのもあって、研究室では後輩の面倒を良く見てくれていましたよ。彼のセンスと人間性があれば、社会に出ても活躍できるでしょう。企業へ就職しても、研究に対する熱意を持ち続けてほしいと思っています。

分析化学分野の若手研究者に贈られる2つの賞を受賞。

2011年、本理学府の川並洋司さんは、『高分子膜修飾電極によるB.L.発光反応の効率化』の研究で2つの賞を受賞しました。1つは、参加した教員と学生全員の投票で決する第29回九州分析化学若手賞。もう1つは、分析化学分野で権威のある日本分析化学会第60年会若手講演賞です。

「運良く賞をいただきましたが、研究はやっと始まったばかりです」と語る川並さん。1本の論文をベースに始めた研究は、実験段階での苦労が多いと言います。

麻酔剤の生体作用の解明に、発光酵素を利用。

研究の根本的なモチベーションは、バクテリアルシフェラーゼ（以下、B.L.）という酵素の発光反応を利用して、麻酔剤の生体への作用メカニズムを解明することにあります。

本来、麻酔剤は、動物に投与して知覚を麻痺させるものですが、同じ麻酔剤を作用させた場合、動物の知

図りました。この研究が、今回の2つの賞の対象となったのです。

「複数の麻酔剤を研究する際、同じ溶液を使って調べると、麻酔剤が混ざって効果がわからなくなりました。ですから、調査する麻酔剤ごとに新しい溶液を用意していたのですが、それは発光の効率が悪い上に、B.L.の費用もかかります。それで、B.L.を取り込んだ膜を電極に付けることを思いついたんです。この方法なら、溶液中から電極とB.L.を取り出して、繰り返し利用できます。さらに、失

活（※）も起こりにくくなるんです」

九大生であることに誇りをもって邁進したい。

今後は、発光系のさらなる効率化と、



覚を麻痺させる度合いと、B.L.の発光を減少させる度合いは同様であることがわかっていました。従って、麻酔剤によるB.L.の発光阻害のメカニズムを解明することは、動物への麻酔剤の作用メカニズムの解明につながると考えられ、研究が進められてきました。

また、実験は、より単純な形で行う必要があります。発光生物に直接麻酔薬を投与するのではなく、生体内からB.L.を抽出し、生体外で発光させる方法が有用でした。

「試薬を使って発光させる方法もありますが、試薬自体が麻酔剤の効果に何らかの影響を与える可能性もあります。そこで、私の研究室では、B.L.の発光に必要な物質を電気分解によって供給する、電気化学的発光方法を確立しました」

高分子膜修飾電極により、発光反応の効率化を図る。

その後、川並さんは、電極の表面を高分子膜などで修飾した「膜修飾電極」にB.L.を固定。発光の効率化を

麻酔剤の作用機構を検討していきたくいと話す川並さん。博士課程への進学が期待されますが、既に分析機器メーカーへの就職が決まっているとのこと。

「就職したら、研究や臨床に役立つ分析機器を開発して、社会に貢献できればと思っています。また、私はたまたま賞をもらったので注目されていますが、九大には私より素晴らしい研究をしている学生がたくさんいます。だから、学生の皆さんには、九大生であることを誇りに思ってもらいたいですね。私も九大生の誇りを持って、残りの研究課題に取り組んでいきたいと思っています」

目的に向かって邁進し続ける川並さん。今後の活躍が楽しみです。



川並 洋司さん DATA
宮崎県立延岡高等学校
九州大学 理学部 化学科
九州大学大学院 理学府 修士課程

memo
中学、高校と弓道部に所属していた川並さん。中学時代には、九州1位、全国2位の成績を残しています。今も地元に戻った時は友人たちと弓道場に足を運ぶのだとか。日頃は、できるだけオンとオフをはっきりさせて、研究に集中できるようにしているそうです。

九州大学の関連 WEB サイトへ
九州大学 理学
<http://www.sci.kyushu-u.ac.jp>

※失活=化学物質などの活性が失われ、反応を起こさなくなること。



松尾所長の話を受講する学生達

YREP

Young Researchers English Program

若手研究者英語研修は、特に大学院博士課程学生向けのものであるが、修士課程学生も博士課程に進む条件で受け入れている。今年は化学系の15人が参加した。

SVEP

Silicon Valley English Program

シリコンバレー英語研修は、学部学生向けのものであるが修士学生も多少入っている。今年は各学部から40人が参加した。

ALEP

Agri-bio Leaders English Program

アグリバイオリーダー英語研修は、農学部学生が主体で学部生、修士学生を問わない。16人が参加した。

プログラムの内容
2011年は左記の3種類のグループに分けて実施した。すべての英語研修はサンノゼ州立大の英語研究所 (Studies in American Language, SAL) において、九大用に特別にデザインしたカリキュラムで行った。

以下に各グループの研修内容について説明しよう。

YREPは、2011年のYREPには将来世界で活躍する研究者を目指す15名の化学系大学院生(博士課程9人、修士課程6人)が参加した。今回で4回目の開催であるこのプログラムは、国際学会等で自信を持つ発表や質疑応答を行えるように、主としてプレゼンテーション能力の向上を目標としている。授業は「効果的なプレゼン」「スムーズな会話のための文法」「アクセントの訓練」「自信を持つ会話法」などに毎週18時間が当てられた。そして、毎週末にフィリデルトリップを行い、UCバークレー校、IBMアルマデン研究所、スタンフォード大学、サンノゼ州立大学



UCバークレーのDoudna研究室で発表するYREP学生

YREPについて

九州大学カリフォルニアオフィス便り

九州大学カリフォルニアオフィス 所長 松尾正人



オラクルの美しい景色を背景にALEP/SVEP学生達

九州大学カリフォルニアオフィス/国際部共催 英語研修2011

日本にいと学生達は英語を話すチャンスが少なく、英語の必要性さえ考えずにいるのが実情である。しかし、外から日本を見てみると、世界は日々変化しており、グローバル化は一層進んでいる。アメリカにきているアジアを含む世界の若者はどんどんグローバル化に対応している

感があるが、日本の若者はそれに取残されているようだ。グローバル化は引き返すことができないところまで来ている。グローバル化に対応するには英語が来ればよいわけではないが、英語ができないければその入り口に立つことさえできない。まずは英語力、しかも日本を出て英語を学ぶことで

グローバル化を、身をもって体験出来るかと考えている。こういう背景のもとにCAオフィス/国際部ではカリフォルニアにおける英語研修に力を入れているわけである。

この恒例の英語研修は、2007年に9人の参加で開始して以来、毎年参加者数が増え、ついに2011年は71人に達した。

このプログラムの特徴

英語研修といっても、このプログラムは英語を学ぶだけではない。力を入れている2つの特徴がある。

1つは、国外に出たユニークな機会を利用して日本を、そして自分を外から見るといふ立場を認識してもらおう。そのための様々なプログラムを用意していることである。国外に出て多くの人と交流し、話を聞き、色々なことに遭遇すると、初めて日本の素晴らしさ、そして現在の日本の問題点が見えてくる。同時に日本にいたのでは気が付かない自分自身のことが見えてくる。

この研修を機会に日本のこと、自分自身のこと、そして自分の周りのことを自分で観察し考え、それを外に向かつて発信することの重要性を認識してほしいと思っている。そのために、このプログラムでは毎週フィリデルトリップを行って大学や企業の訪問を行い、外部講師を招待して講演をお願いしている。

もう1つの特徴は全員アメリカ人の家庭でホームステイを行う、異文化の中で4週間を過ごすことである。英語を話さなければ、何も起こらないし、毎日気に入らない食事でも我慢しなければならぬ。こういう実生活を現地で体験することで、英語は学ぶものではなくて慣れるものであり、意思疎通のツールにすぎないことがわかる。それよりも自分が言いたいことをはっきり持つことが大事であることに気が付くのである。

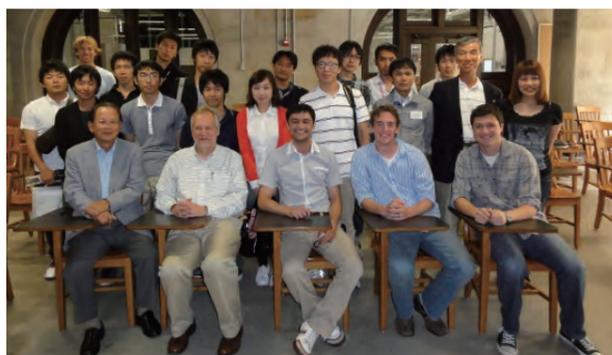
このプログラム全体にわたってCAオフィスのスタッフが毎日のように学生に接し、問題がないか手厚くチェックしており、何か問題が起ると直ちに対応するようにしている。

などの化学・生物系の研究室を訪問し、訪問先の教授や研究者と交流し、参加者が各自の研究内容について英語でのプレゼンテーションを行った。CAオフィスではこれらプレゼンテーションに先立ち各人の個別発表練習会を催し自信を持って発表できるよう指導した。個別指導に使った時間は12人の発表者に対して合計で30時間に達した。一方で、プラグ・アンド・プレイというインキュベーションセンターを見学し、ちょうど行われていたスタートアップ会社の発表会を聞いて科学や技術がビジネスに繋がる現場を身近に体験した。それに加えて、シリコンバレーのビジネスマンや研究者、およびスタンフォード大学の教授陣から講話や講義を聞くチャンスも作り、インベーションのメッカであるシリコンバレーの人々の考え方を学んだ。

YREP学生は何を学んだか

参加者は毎日実践的な英語の授業による英語力向上に加え、世界のイノベーションを牽引するシリコンバレーを体験した。その結果、世界で活躍する革新的な研究者と

してのマインドはどうあるべきかを認識し、自分の研究以外の様々な分野の幅広い知識と理解がいかに必要であるかを肌で感じ、インベーションを起こしそれを事業につなげることの大事さを身近に体験することができたようである。さらに、世界で活躍するには英語力がいかに不可欠であるかがわかり、明確に英語を学ぶ強いインセンティブが得られた。非常に有意義なプログラムであったとの感想が全員に近い参加者より寄せられている。次頁で参加者の中から5人のレポートを一部抜粋し紹介する。



YREP、UCバークレーGlaeser研究室の皆さんと

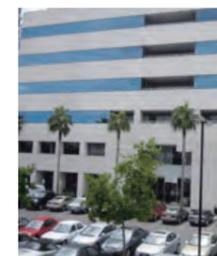


スタンフォードJasper Ridgeで
Dr. Cohenの説明を聞くALEP学生達

この研修の満足度は、48人の集計を平均5点満点の4.4という高い評価であった。

この研修により自分の視野は間違いなく広がり、考え方も変わった。フィールドトリップでは、自分の分野とは全く関係ない分野であったが、シリコンバレーとはどういうところなのか、日本とアメリカの企業の違い、半導体について、起業についてなど、全てが興味深かった。

留学を考える学生も多く出てきた。



九州大学カリフォルニアオフィス
560 S. Winchester Blvd. Suite 500
San Jose, CA 95128, USA
<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/california/index.html>

最後に費用に関して述べると、SVEP/ALEP学生の個人負担は直接費用だけでも一人40万円に達する。ロバート・ファン同窓会基金からバス代などを一部支援している。幸い文部科学省もこの短期派遣の必要性を認識し、2011年から短期海外派遣（シヨトビジツト）を含む留学生交流支援制度を開始した。今回のSVEP/ALEP学生は初めてその恩恵に浴し、大変喜んでい



SVEP/ALEP、少人数での英語の授業

【おわりに】
日本国内市場の縮小傾向を反映して、日本企業の海外志向は一層増大している。これからは英語ができないでは就職にもマイナスとなる。さらに、自分の専門知識は絶対に必要であるが、その知識を効果的に使うためにはもっと周りの関連することを知らなければならぬ。それに加えて、世界のどこでも働ける広い視野と異文化に対する付き合い方を知っておくことが何よりも求められるであろう。学生の反応を見ると、この研修は英語力に加えて、そのような社会の変化をはつきりと気付かせ、何をしなければならぬかを考えさせるきっかけになったようである。自分で一層のレベルアップに努めて留学を考える学生も多く出てきた。

ALEP/SVEP学生は何を学んだか
学生達はこの研修で何を学んだのかについて、これまでに集まったレポートからいくつかの引用を挙げる。なんとこれもほとんどの学生が、英語を話すことができるようになったと言っている。その上、フィールドトリップで現場のエンジニアと直接話す機会を得て、リーダーたちの講演を聞いて、自分で考え発言することの大きさを感ずる。世界が広がったと言っている学生が多い。この研修の満足度は、48人の集計を平均5点満点の4.4という高い評価であった。

よるプレゼンテーションを行った。多くの学生が幅広い分野から興味深いテーマを取り上げ、英文原稿を読まずに堂々と自信に満ちたプレゼンテーションを行い、それぞれに研修の成果を十分に感じ取っていたようだ。

自分の世界観が大きく変わった。参加前は日本的な思考や見方しか出来なかつたので、最初は日米の違いに戸惑うばかりだった。日本では誰かの意見に黙って付いていけばよかったが、アメリカでは自分の意見が第一に尊重された。自分の意見が言えなければ話も聞いてくれなかつたことはショックだった。

【おわりに】
以前に比べてだいぶ積極的になった。また、自分で考えること、自分なりの意見をまとめ、時として主張することの大切さを身にしみて感じた。

最後に費用に関して述べると、SVEP/ALEP学生の個人負担は直接費用だけでも一人40万円に達する。ロバート・ファン同窓会基金からバス代などを一部支援している。幸い文部科学省もこの短期派遣の必要性を認識し、2011年から短期海外派遣（シヨトビジツト）を含む留学生交流支援制度を開始した。今回のSVEP/ALEP学生は初めてその恩恵に浴し、大変喜んでい

ここに初めて起業はリスクではなくチャンスであるということに胸が高鳴った。それだけここに来たことは私にとって大きな衝撃だった。

世界の最先端は自分の想像を超えたスピードで発展していた。フィールドトリップをする中で、いかに自分が狭い中で世界を考えていたかが思い知らされた。

このプログラムに参加して一番変わったと思う点は、自信をもって発言できるようになったことである。これまでは失敗を恐れて、できるだけうまくやろうという感情がどこかにあったと思う。しかし、今はプレゼンするときでも会話のときでも、自分の意見を自信を持って発言できるようになったと思う。本当に充実した時間をこのプログラムで過ごすことができた。

ホームステイではホストマザーの英語が聞き取れず「Don't be shy. You should speak more.」と何度も言われ悔しい思いをした。



スタンフォードZare研究室で発表するYREP学生

だが、慣れてくると少し余裕を持つて会話ができるようになった。アメリカでは沈黙が嫌われる。常に自分の意見を持ち、それを発言できなければならぬことを強く思った。

IBMで初めて英語による自分の研究内容のプレゼンテーションをした。発表前には、相手に理解してもらったための表現や、英語の発音の仕方など様々なことを指導してもらったが、まだまだ未熟な発表だった。しかし、自分に足りないもの、またこれからいなければならないことが何なのかはつきり見えてきた。

SALEPPについて
次いでALEP、SVEPについて述べよう。

まず、ALEPには農学部から16人の参加があり、姜益俊准教授が4週間付き添った。また、SVEPは各学部から40人の参加があり、学部生36人、大学院生4人の構成である。多いのは工学10人(学部8、院生2)、医学8人で、そのほかは経済(5)、法学(4)、文学(4)、薬学(2)、理学(学部2、院生1)、芸工、21世紀、教育などの学部および統合新領域学府からの参加もあった。

英語の授業は合計56人の学生を4つのレベルに分けて行い、「プレゼンの方法」、「アクセント訓練」、「会話とヒアリング」、「キャンパスのイベント」の4種類の授業が、それぞれ専門の教師によって毎週18時間、4週間行われた。

フィールドトリップはALEPとSVEPでは異なる。ALEPのフィールドトリップは農学に関連するところを選び、日本庭園「箱根ガーデン」を皮切りに、サンフランシスコの北にあるレッドウッド

ドの森ミューウッド、スタンフォード大学の演習農場やバイオの研究室、UCデービス農学部、サラダコスモ社でのモヤシ製造の見学、オラクルなど多岐にわたった。SVEPのフィールドトリップは主として企業を中心としている。インテル展示館、アツプルストア、ヤフー、オラクル、プラグ・アンド・プレイ、半導体装置メーカーノベラス、そしてスタンフォード大学などを訪問した。

ホームステイは56人が35軒のファミリーに分かれ、そこから毎日大学へ通った。最初はなかなかホストの言うことがわからず会話ができなかつたようだが、家族の行事、料理やイベントなどに参加して毎日一緒に生活すると、だんだん会話ができるようになり、後半になると英語を話すことに抵抗がなくなつたようだ。

最終週には56人全員がアメリカに来て感じたことについて自由にテーマを選び、5分程度の英語に



ヤフーで中国人エンジニアから話を聞くSVEP学生達

大学講堂を寄附

九州大学は椎木正和様（しいき教育文化振興基金会長）より、九大百年を象徴し、学術芸術文化の拠点となる大学講堂の建設費を寄附いただくことになりました。

寄附の経緯

本学は平成23年（2011年）に創立百周年を迎えるに当たり、総長を委員長とする百周年記念事業委員会を設置し、平成18年から募金活動等を行ってきました。また、本学の百周年記念事業を学外から支援するために、地元経済界をはじめ関係団体のご賛同を得て百周年記念事業推進会が設立され、多大なご支援とご協力を賜りました。

このたびの大学講堂の寄附は、百周年記念事業を展開するなかで、推進会の方から、教育文化振興事業の支援に取り組まれている「しいき教育文化振興基金」会長の椎木正和様をご紹介いただいたことによるものでした。明日の社会を担う人材の育成と地域の発展に貢献する教育研究文化施設等の整備・充実についてご支援をお願いしたところ、格別のご高配により大学講堂の建設費をご寄附いただくことになりました。

寄附について

講堂は、知の探求・創造と継承・蓄積を推進する基幹総合大学として、地域社会と共に栄え、世界へ飛翔し続けていくために相応しい建物とし、入学式・卒業式等が挙行できる大学講堂としての機能に加えて、地域連携・産学連携・国際交流を担う拠点として、多目的な利用にも対応できる施設とします。また、日常の管理・運営にも配慮したものとします。

大学講堂の名称は九州大学顕彰規程に則り、寄附者の名前を冠して、「椎木講堂」とします。また、講堂の設計・工事監理は、寄附者の指名により、建築家で東京大学名誉教授の内藤廣氏が担当されます。これらの確認のため、椎木正和様と有川節夫総長との間で合意書が取り交わされました。

大学講堂計画の基本方針

建設にあたり、寄附者の椎木様と本学の間で意向を確認し、以下のような「計画の基本方針」を定めました。

計画の基本方針

九大百年を象徴し、学生や教職員への誇りとなり、市民を惹きつけ、新しい学術芸術文化の拠点となる講堂をつくる。そのため、象徴性、先進性、持続性を有する施設とする。

① 象徴性
百年の歴史と伝統を基礎とし、新たな百年に向けて、最高水準の学術研究を推進する九州大学にふさわしい象徴性を有する施設とする。

② 先進性
「九大百年」、九州大学の「これまでの百年」と「これからの百年」を象徴する外観の建物とする。
・新たな百年に向けて躍動する九州大学の核となる施設とする。

② 先進性

大学講堂としての機能に加え、地域社会・国際社会・学界等の要請にも対応できる先進性を有する施設とする。

・大学の主要行事（入学式、卒業式等）に対応する人員を収容できる施設とする。
・学内外の多目的な利用に対応しやすい施設とする。

③ 持続性

日常の管理・運営を十分に反映し、多目的な利用に対応しやすく、時代を超えて使われる持続性を有する施設とする。

・大学の中枢機能（管理運営等）を有し、日常的に使用できる施設とする。
・低炭素社会、循環型社会に貢献する施設とする。

大学講堂の概要

- ① 建物名称 椎木講堂
- ② 寄附者 椎木正和氏
（しいき教育文化振興基金会長）
- ③ 建設場所 福岡市西区
伊都キャンパスセンターゾーン
- ④ 床面積 9,000～10,000㎡
- ⑤ 設計・工事監理 株式会社内藤廣建築設計事務所
- ⑥ 工事着工 平成24年11月（予定）
- ⑦ 完成 平成26年2月（予定）

設計者 内藤廣氏

建築家、東京大学名誉教授。1974年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1976年同大学大学院修士課程修了。1981年内藤廣建築設計事務所設立。2001年東京大学大学院工学系研究科助教授、2002年教授。2011年からは副学長としてキャンパス計画を担当。2011年3月退官。

代表的な建築作品に「安曇野ちひろ美術館」「牧野富太郎記念館」「島根県芸術文化センター」がある。



設計者内藤廣氏から大学講堂について説明を受ける有川総長ら大学関係者

大学講堂の建設位置図
(伊都キャンパス)



百周年記念事業

18

知の新世紀を拓く

寄附報告

九州大学百周年記念事業の趣旨にご賛同いただき、多大なご協力ご支援を賜り深謝いたします。本学の教育・研究・診療等の充実のため、今後ともご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

百周年記念事業寄附状況

1 寄附金		(平成23年11月24日現在)	
	件数・人数	寄附額(千円)	
企業・団体等	585	3,050,701	
個人	卒業生	7,245	368,118
	在学生の保護者	851	18,540
	教職員・退職者(名誉教授等)	2,513	260,223
	有志・個人篤志家	25	158,785
	計	10,634	805,666
合計		3,856,367	
2 建物、物品等		寄附額(千円)	
	件数等		
稲盛財団記念館	1棟	922,000	
京都賞ライブラリー	1件	11,303	
時計塔	2件	5,617	
絵画	2件	—	
書籍	3件	—	
胸像	1件	—	
樹木	1件	—	
合計		938,920	
総計		4,795,287	

百周年記念事業推進室からのお知らせ

「九州大学基金」について

百周年記念事業へ温かいご支援を賜り、誠にありがとうございます。現在、百周年記念事業で創設しました「九州大学基金」へのご寄附をお受けする準備をしております。それまでは、引き続き、百周年記念事業へのご寄附をお受けしております。また、「九州大学基金Webサイト」を作成中です。完成しましたら、九州大学Webサイト等でお知らせいたします。今後、九州大学では、「九州大学基金」の支援助成事業、募金強化事業に全力を挙げて取り組んでまいります。より一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

「お詫び」

「九州大学創立百周年記念事業報告書」の訂正について

八月末から順次、ご支援ご協力いただいた皆様へ、「九州大学創立百周年記念事業報告書」をお送りさせていただいております。報告書の「寄附者芳名録」におきまして、お名前の間違いがございました。こちらの不手際で大変ご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした。お詫び申し上げますとともに、以下のとおり訂正させていただきます。

「お名前の訂正」

- 七二ページ左から一列目 上から二番目 (正)今藤 友紀
- (誤)今藤 有紀
- 七三ページ左から一列目 上から十番目 (正)今村 史朗
- (誤)今村 史郎
- 七三ページ右から一列目 上から十番目 (正)蝦原 健治
- (誤)蝦原 健治
- 七四ページ右から一列目 下から三番目 (正)大野 昌一郎
- (誤)大野 昌一郎
- 七九ページ左から一列目 下から十三番目 (正)菊地 恭三
- (誤)菊地 恭三
- 八二ページ右から一列目 上から九番目 (正)小田部 善太郎
- (誤)小田部 善太郎
- 八四ページ右から一列目 上から七番目 (正)迫 敏定
- (誤)迫 俊定

寄附者ご芳名

九州大学百周年記念事業にご協力ご支援いただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます。

本号では、本年八月二十七日から十一月二十四日までに寄附申込まれた皆様を五十音順に掲載させていただきます。

企業・団体等

- 株式会社カネカ
- 九州大学農学部農芸化学科
- 昭和二十七年卒業生の会
- 株式会社コアラ
- 電気化学工業株式会社
- 鳥越製粉株式会社
- 日本アイ・ビー・エム株式会社
- 日本化薬株式会社
- 日立建機株式会社
- ほか匿名希望一社(計九企業等)

個人

- 池上 恭子 古賀 彰
- 石田 清隆 小島 孝之
- 板橋 義三 阪本 篤史
- 稲継 久範 潮崎 公雄
- 伊豫本 直子 執行 浩則
- 岩崎 孝志 志水 俊広
- 岩永 惇正 徐 超男
- 宇多田 正純 但馬 史人
- 宇都宮 靖雄 田村 良一
- 江口 和夫 寺元 真治
- 遠藤 渉 中野 嗣久
- 大河内 康正 中村 比吉夫
- 岡田 光男 中山 民男
- 梶川 祐亮 名本 幹雄
- 片山 伸也 蓮尾 稔次
- 金本 祥太 廣田 勇
- 北村 敏博 福山 洋
- 久原 重英 帆正 博己
- 倉田 元子 帆正 博己

牧之内 顯文

- 増田 榮 松永 佳奈
- 松吉 輝明 道信 耕一
- 宮原 広郁 山本 正明
- 吉成 惠美 吉本 克陸
- 渡邊 敬二郎 ほか(匿名希望四名(計五五名))

お問い合わせ 九州大学総務部百周年記念事業推進課

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
 電話 092-642-7397・7398 FAX 092-642-2113
 E-mail 100thinfo@jimu.kyushu-u.ac.jp
 [100周年Webサイト] http://www.kyushu-u.ac.jp/100th/

創立百周年記念 第3回QUウォーク開催



平成23年11月3日(木)、大濠公園を出発し、伊都キャンパス体育館まで歩く九州大学創立百周年記念・第3回QUウォーク(主催:健康科学センター、百周年事業推進室)が開催されました。

「九州大学百周年記念QUウォーク、頑張るぞ」の掛け声とともに大濠公園能楽堂前を8時過ぎに出発した



休憩地点の小戸公園にて



完歩して記念品を受け取る参加者の方々

207名の参加者は、ももち浜、小戸公園、長垂海浜公園を経由して、21km先のゴールである伊都キャンパスを目指しました。

12時前から14時頃までにゴールした完歩者には記念のFinishタオルや協賛企業からの記念品が配布されました。

このイベントは、ウォーキングを通して、運動や健康の重要性を実感することや、参加いただいた地域住民の方々と大学関係者との交流を図ることを目的に、九州大学創立百周年記念のイベントとして開催されたものです。

次回、第4回となる来年度は5月13日(日)に天神中央公園をスタート地点として開催します。ゴールとなる伊都キャンパスでは、九大100年まつりが開催されておりお楽しみいただけます。多数の参加をお待ちしています。

創立百周年記念 京都賞シンポジウムを開催



平成23年11月15日(火)、伊都キャンパスの稲盛財団記念館稲盛ホールで、九州大学創立百周年記念京都賞シンポジウムが開催されました。

京都賞は、科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に著しく貢献した方々の功績を讃える国際賞ですが、今回、第27回(2011年)京都賞受賞者のジョン・ワーナー・カーン博士(米国立標準技術研究所名誉上級研究員、ワシントン大学客員教授)を迎えて、福岡での初の京都賞シンポジウム開催となりました。

「ものづくりの科学と探究する心―新しい合金への道―」と題したシンポジウムには、福岡県内の高校生をはじめ約420人が参加しました。主催者を代表し、落合英俊理事の挨拶、巖佐庸高等研究院院長によるカーン博士の紹介の後、カーン博士の記念講演が行われました。

カーン博士は、科学者としてのご自身のこれまでのキャリアやご専門の材料工学について講演されました

が、高校生に対し「皆さんには、まず自ら学ぶことを学んでほしい。そして、これからの人生で、たとえ躓いたとしても、そのことは次の成功への機会を得たことであり、是非自分の持っている知識を信じて問題に立ち向かってほしい」とメッセージを送り、講演を締めくくりました。

その後、カーン博士は、伊都キャンパスを視察され、水素材料先端科学研究センター(HYDROGENIUS)では、村上敬宜教授から水素の研究について説明を受けられ、その後、超高压電子顕微鏡棟に移動し、松村晶教授の案内により施設を視察されました。



講演会でのカーン博士

写真で見る「九大百年」展

―常設展示と内外貸出が始まる

九州大学は百周年を迎えるに当たって、その歴史を記録した数々の写真の中から161枚を厳選して、写真パネルを制作いたしました。本年刊行された『九州大学百年史写真集』（九州大学図書館編集）の構成と写真に依拠しながら、その他の写真も使用しています。

前史を含めて百数十年に及ぶ歴史に思いを馳せると共に、更なる発展を続ける九州大学のあり方を考えるためのよすがとなるようにとの願いが込められています。福岡医科大学附属病院、工科大学本館（初代）とい



実習前の解剖学教室講堂にて(昭和30年)

た今や見ることでできない建造物や、アインシュタインの来学(大正11年)、学徒出陣(昭和19年)といった歴史的事件のほか、キャンパスの内外で輝いていた青春の一齣が鮮やかによみがえってきます。

当初の計画では、本年5月12日の記念式典に併せてエルガーラを会場に「写真で見る『九大百年』展」を開催する予定でしたが、東日本大震災に鑑みて関連行事が一年延期となったため、10月22日より箱崎キャンパス旧工学部本館一階で常設展示を行うことになりました。平日の午前9時30分から午後5時まで、同窓生はもちろん一般の方の観覧も可能です。

本写真パネルは、長期にわたって様々に活用できるように、しっかりとした木枠で作られています。大学の公式行事に使用するほか、各学部・地域の同窓会などにも貸し出しが可能になっています。観覧及び借用をご希望の方は、事前に左記までお問い合わせください。

九州大学総務部百周年記念事業推進課
(092)642-173697

九大百年



九大百年記念グッズのご案内

九州大学創立百周年を記念して、新しく2点が「九大百年記念グッズ」として販売されることになりました。

九大百年記念限定 「本場縞大島紬ストール」

本場大島紬伝統工芸士重田茂和氏(本場大島紬伝統工芸士協会会長)に依頼し、本場縞大島紬のストールをつくりました。

いずれも男女兼用で3シーズンお使いいただけます。大島紬の絹糸を使った贅沢なもので、九州の誇らしい職人技の作品です。



※全て受注生産のため、お届けまでに数ヶ月お待ちいただけます。また、返品・交換はできませんのでご了承ください。

価格・店頭価格12,000円(送料別途)
サイズ・長さ約1,630mm×幅約295mm
材質・絹100%
納期・約1ヶ月
お問い合わせ:九州大学生生活共同組合
(092)651-17138

九州大吟醸 特別記念酒 「九大百年」

地元糸島産酒米「夢二」を100%使った純米大吟醸原酒をつくりました。世界との交流が続く歴史ロマンの地に、九州大学が次の百年を築いていく夢を重ね、力強く華やかな九大百年限定酒をお楽しみください。ラベルの題字は、書家の柿沼康二氏によるものです。



※お酒は20才になってから

価格・5,250円(送料別途)
容量・1,500ml(桐箱入り)
製造・お問い合わせ:浜地酒造株式会社
(0120)159-0359

本学名誉教授、教授が数々の名誉ある賞を受賞

内海英雄名誉教授が、 平成23年秋の 紫綬褒章を受章



内海名誉教授は、東京大学大学院薬学系研究科博士課程を修了後、帝京大学薬学部講師、昭和大学教授等を経て、平成6年に本学薬学部教授に就任し、平成22年3月まで、本学において教育・研究・管理運営に携わってこられました。現在は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構の理事・審査センター長として審査の業務に携わりながら、本学において、先端融合医療レドックスナビ研究拠点長を務めておられます。生体磁気共

鳴画像学を専攻分野とし、国内初の生体レドックス動態計測・画像化装置を開発しました。また、単独の研究室で造影開発と疾患解析も同時並行で進めるといふ世界初の取り組みにより、独創的かつ斬新な生体レドックス解析法を確立し、我が国の生体レドックス研究を飛躍的に発展させました。このように、基礎薬学研究から臨床医学研究への展開に至るまで、卓越した業績を挙げ、卓越した先見性によつて学術研究と教育の発展に大きな貢献をなしてきたことが評価されたものです。

國武豊喜名誉教授、 平成23年秋の 瑞宝重光章を受章

國武名誉教授は、長年にわたり本学工学部において高分子化学ならびに分子組織化学の研究教育に努められ、その間、高分子触媒の開発、合成



二分子膜の発見や分子膜化学の展開をはじめとする、数多くの優れた業績を残されました。また、工学部長を務められるなど、大学の管理運営においても多大な貢献をされました。現在は、財団法人北九州産業学術推進機構理事長として活躍中です。

応用力学研究所の 藤澤彰英教授が、 2011年度 仁科記念賞を受賞

仁科記念賞の授賞は、著名な物理学者であった仁科芳雄博士の功績を記念し、原子物理学とその応用に関して優れ

た研究業績を挙げた若手研究者を表彰することを目的として行われている大変権威のあるものです。

九州大学からは、過去に伊藤早苗主幹教授（応用力学研究所）、井上研三教授（理学研究院）などが受賞しています。今回の受賞の対象となった研究業績は、「高温プラズマにおける自発電磁場の実験的検証」です。



ノーベル賞受賞者の小柴昌俊博士、小林誠博士も出席した贈呈式での記念撮影（前列左から3人目が藤澤教授）平成23年12月6日（火）東京会館にて

九州大学福岡同窓会 第1回九大アラムナイ・フェス



講演に立つ川原尚之氏

平成23年10月22日(土)、箱崎キャンパスで九州大学福岡同窓会「第1回 九大アラムナイ・フェス」が開催されました。「九大アラムナイ・フェス」は、今年の4月に発足した九州大学福岡同窓会が、秋の総会を開催するにあたり、同時に、学部に関係なく、卒業生、在学生、留学生、教職員や地域の皆様との交流を深めるために企画されたものです。

先立つて行われた総会では、会長である株式会社博多座代表取締役社長の芦塚日出美氏(昭37工卒)が地元福岡での懇親の場ができたことへの喜びと、今後さらに発展することへの期待を述べました。芦塚会長の開会宣言により始まったアラムナイ・フェスでは、九大や近隣地域に関わる様々な取り組みを紹介したブース展示、在学生・留学生に向けたOBによる就職相談会、九大ファイルをはじめとした学生サークルによるステージ発表、約20の露店が軒を並べた「つまか



もん市」等があり、悪天候にもかかわらず約1,000人の方々にお越しいただきました。今回の大きなメインイベントとなった15時からの特別講演では、NPO法人ロシナンテス代表として、スーダンで活躍されている川原尚之氏(平4医卒)が、自身の経験を語りながら、「自分がやるうという意識があれば、何事も乗り越えることができる」と熱く語り、参加者を勇気づけるものとなりました。



九百年の今年、ゼロから始まった同窓会ですが、何とか1つの場を設けることができました。今後も、引き続き各同窓会・活動団体とも連携を深めて、交流を促進して参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

福岡同窓会 鎌田幸治(昭62工卒)

歯学部同窓会 定例会議

去る9月10日(土)評議員会・総会に先立つて前日に全国21支部の代表者が一同に会する全国支部長連絡会議が博多グリーンホテルにて行われ、前日本歯科医師会常務理事・日高潤二先生(6期生)に「歯科医師会活動を振り返って」というテーマでご講演いただき、その後懇親会が行われました。



原野会長

翌11日(日)九州大学歯学部臨床研究棟にて歯学部同窓会の評議員会および定時総会が開催されました。総務・広報・学術・会計・ホームページ・派遣医連絡な



日高先生講演

どの各委員会からの報告が行われました。本年は3年おきに発行している同窓会会員名簿の発行委員会からの作成日程等の報告もありました。議題は平成22年度事業報告および決算の承認を求め、平成22年度決算報告において、全員の賛成をもって承認されました。生涯メールアドレスサービス利用の勧めや同窓会連合参加による交流の広まりなどの報告もあり、全学挙げての親睦への期待が高まる総会となりました。

歯学部同窓会は、ほとんどが歯科医師という同業者で構成されているため、同窓生の交流目的だけでなく、学術団体や互助会としての性格も持っています。同窓会主催の学術講演会やセミナーを開催、また、全国的に注目される、急病時に代診医を派遣する制度があります。今後はフェイスブックを利用した連絡網整備や女性歯科医師就労支援なども企画しており、活動の充実を期待されています。

法学部同窓会 総会

10月21日(金)の午後7時より、西鉄グランドホテルを会場に、第37回の法学部同窓会総会および懇親会が開催された。同窓生をはじめとして、教員や来賓、現役の学部学生や留学生を合わせ、約200名が参加した。

今年の総会は、陶山会長と酒匂法学研究院長が就任して、はじめての総会であった。陶山会長は、同窓会のあり方を積極的に改善していくとの方針を打ち出している。その一環として、今年の総会はパワーポイントを活用して簡略化・簡素化された。また懇親会場で多くの会員



が参加可能なかたちで行われた。

総会と懇親会には、有川総長代理として落合副学長

や、山本経済学研究院長にも来賓として参加いただいた。また東京

同窓会や関西支部をはじめとする各支部からもご参加いただき、各地の同窓会活動のご報告をいただいた。さらに懇親会では、例年同様に、名誉教授の先生方、法学研究院教員、留学生などの紹介も行われた。

会場は終始和やかなムードで、多くの会員が旧交を温めた。なお法学部同窓会では、卒業後間もない若い会員の参加費を安くすることで、比較的幅広い会員の参加を例年実現できている。今後も、世代を超えて交流できる機会として発展させていきたい。

九州大学法学部同窓会事務局長・
法学研究院教授 出水薫



筑後地区九大同窓会

平成23年度筑後地区九大同窓会は11月5日(土)久留米市ブリヂストンクラブにて開催されました。出席者は会員73名、来賓として大学本部から落合副学長、ありあけ九大から蓮尾副会長、山田会計幹事にご出席いただきました。

当日は総会に先立ち、落合副学長より「九州大学の未来」と題して大学の現状や将来の教育体制などについてご講演を頂きました。画像を使いながらの懇切なお話は大変参考になり、卒業生一同はこれからですとますます発展してゆく大学の姿に大変驚き、感激と誇りを感じました。総会では野田会長(昭25経卒)の挨拶、来賓ご挨拶に引き続き、公職者紹介、会計報告等の後、最年長の山下辰雄さん(昭21工卒)の音頭による乾杯で懇親会に入りました。

原武哲さん(昭32文卒)から久留米出身のドイツ文学者 菅虎雄と夏目漱石についてのエピソードが披露されるなど、楽しいひと時を過ごしました。

筑後地区九大同窓会は全学部を対象にしていますので、初めて参加する方も多く、会員間で積極的に名刺交換を行うて交流の輪を広げています。

最後は九大グリークラブOBの音頭で出席者全員による学生歌「松原に」の大合唱で盛会のうちに無事終了しました。

筑後地区九大同窓会 福田洋一
(昭33経卒)



落合副学長による講演「九州大学の未来」



稲田の除塩プロジェクト

陸前高田市で九大生らが取り組む「水田再生」へのプロジェクト

平成23年9月、本学教員・学生をはじめとした36名のボランティアスタッフが「がんばっぺし福岡応援団」の皆さんが東日本大震災で津波の被害を受けた右手県陸前高田市を訪れ、「稲田の除塩プロジェクト」の活動を行いました。今回、「がんばっぺし福岡応援団」のスタッフの一員である理学部4年の早川方樹さんが現地での活動を紹介します。

私たち「がんばっぺし福岡応援団」は、9月27日～10月4日の8日間、岩手県陸前高田市へ行ってきました。目的は、私たちが行っている「稲田の除塩プロジェクト」の現地での作業です。



サンプル分析

プロジェクトのスタートは、今年のゴールデンウィークにさかのぼります。知人と訪れた岩手県陸前高田市。作業を終え、私たちは津波をかぶり塩害を受けた田んぼから土壌のサンプル

を持ち帰り、工学研究院の大嶺聖准教授に分析を依頼しました。「何か見つかるかもしれない」と思ったからです。

分析の結果から、私たちは、大嶺先生と相談し、津波被害を受けた稲田で好塩菌を用いて、除塩作業を行うことを決めました。6月上旬には、その準備段階として、大嶺先生に現地でもウモロコシの種をまいていただきました。塩分をトウモロコシの根に吸収させ、地下深くまで塩分が沈むのを防ぐためです。また、復興の象徴であるヒマワリの種もまいていただきました。そして、いよいよ好塩菌を用いた除去作業のスタートとなります。

好塩菌には塩類を好んで食べ増殖する性質があり、土壌の塩分を吸収し塩害を緩和する効果があると見込まれています。この性質を応用し、



好塩菌をまく大嶺准教授

「田んぼを何とかしよう」という思いからスタートしましたが、今、このプロジェクトが地元の方の希望になっていくことを本当に嬉しく思います。

そして、今後私たちが活動を続けていく上でも、地元の方とのつながりがあることがとても大きな意味を持っていると実際に現地に行き、改めて感じるようになりました。

私自身現地に今まで4回行きましたが、地元の方も明るくなってきています。支援をする中で最も大事なことは「支援する相手の顔が見えていること」。「この人を助けたい」という明確なビジョンがあることだと思います。

現地に行き、想像を絶する光景を目の当たりにして「何かしたい」という気持ちが芽生えてきた時に、「相手の顔・明確なビジョン」があれば地元に戻ってからも途切れることなく活動していくことができると思います。

私たちの今後の主な活動としては、1月中旬に陸前高田市の地元の方を福岡にお呼びし交流



好塩菌の培養

塩害に見舞われた稲田に好塩菌をまき、除塩を行うのです。

9月には、

培養していた好塩菌を持参し陸前高田市を訪れました。いよいよ「稲田の除塩

プロジェクト」の現地でのスタートです。

現地での作業を前に私たちが想定していた作業内容は以下のものでした。

まず、好塩菌をまく田んぼの準備として

① がれきがあれば撤去する

② 既に植えていたトウモロコシや大きなヒマワリを草刈機や鎌で切り取る

そして、この後、実際の好塩菌を用いた作業になります。

① 木杭などで1回分の好塩菌をまく面積を決める

② 好塩菌堆肥と米ぬかを混ぜた「散布剤」を作成する

③ 決められた面積に散布剤をまく

④ トラクターでひまわり、トウモロコシの茎と一緒に浅くすき込む（混ぜ込む）

⑤ 好塩菌を土地になじませるため、菜の花、ライ麦の種をまく

⑥ 土地をならす

会を開くことや、3月には再び陸前高田市に行き、好塩菌の効果の徹底検証及び水路復旧を行い稲田を作ることを検討しています。詳しくは、

「がんばっぺし福岡応援団」Webサイト

<https://sites.google.com/site/ganbappeshi/>をご覧ください。

理学部地球惑星科学科 4年 早川方樹



ボランティアメンバー

しかし、現地に行ってみると私たちの想定外の状況が待っていました。まずは、想像以上にヒマワリの茎・雑草が生い茂っていたのです。私の背丈を越えている場所もありました。先発隊からこのような報告を受け、10台の草刈機で一斉に行ったのですが、量が膨大でなかなか終わりません。そこで、大嶺准教授が全体の工程表の見直しを行い、作業工程を変更した結果8日間で作業内容を無事終えることができました。

予定していた作業内容を無事終えるということも大きなことでしたが、実は、私がこの活動の中で一番不安だったのは、20歳～74歳と年齢が幅広い36名のボランティアの方々が一つのチームとして上手くまとまるのかということでした。

しかし、その不安もすぐに無くなりました。現地到着の翌日に地元の方が親睦会を開いてくれたのです。地元の方とお酒を飲みながらじっくりお話を聞くことができ、ボランティア一人一人は何かを感じ取りました。感じた思いはそれぞれだったかもしれませんが、これを転機にチームはより強くまとまりました。

また、嬉しいこともありました。「私の田んぼにも好塩菌を分けて欲しい。」と地元の方が言いに来てくれたことです。街全体の復興プランが見えない中、ただ待つこともできず、私たちに声をかけてくれたそうです。

このプロジェクトはある1人の農家の方の

九州大学テニユアトラック制について

本学は、公正で透明性の高い審査で選ばれた優秀な若手研究者が、任期付の雇用形態で自立した研究者として経験を積み、審査を経て安定的な職に就くことができる仕組みを普及・定着させることで、優れた若手研究者を育成し、本学の研究活動の活性化を図ることを目的に「九州大学テニユアトラック制」を実施します。

本学は既に科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」事業の採択を受け、平成18年度からテニユアトラック制を前提とした「次世代研究スーパースター養成プログラム」を実施してきました。このプログラムは、優秀な若手研究者の育成とともに「新研究分野の開拓」、「既存の研究組織の改革」を目的としていました。このプログラムで構築した基盤をもとに、以下のとおり本学オリジナルの「九州大学テニユアトラック制」を実施します。

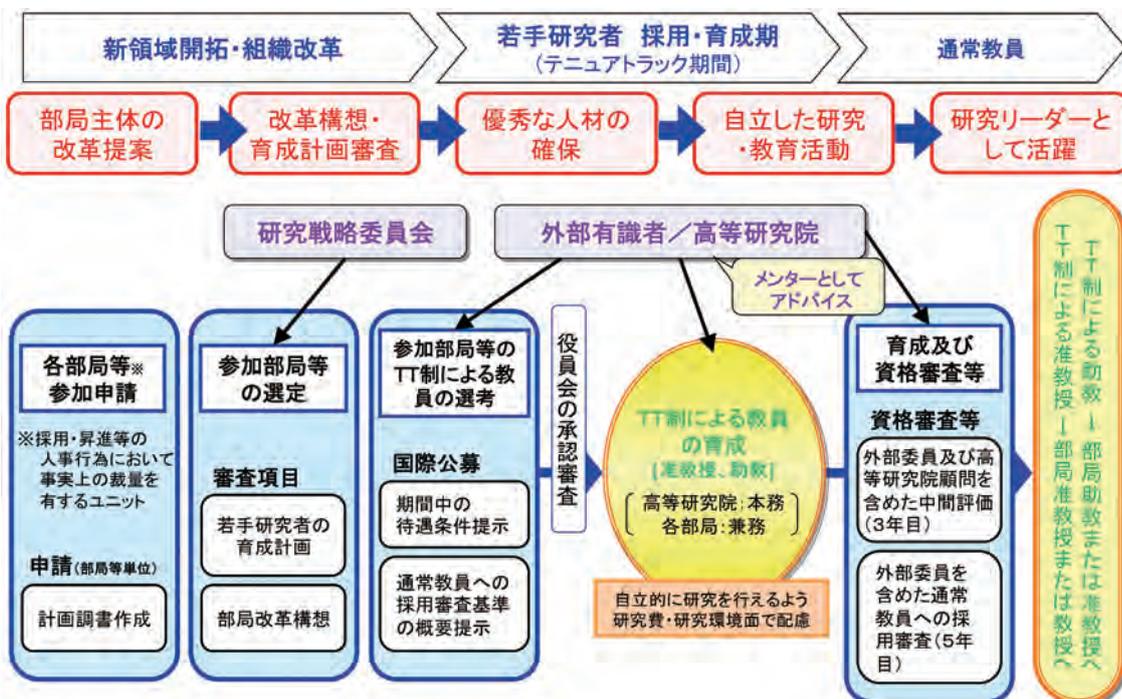
「次世代研究スーパースター養成プログラム」において採用された若手研究者は、原則5年間の期限付きで雇用され、自立して独創的な研究を展開してきました。その結果、7人が科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞し、

またテニユアトラック期間終了後13人が本学准教授として採用されています。

九州大学テニユアトラック制の概要

- ① 各部門から、制度の趣旨に沿った若手研究者育成計画を募集する。
- ② 研究戦略委員会や若手研究者育成計画を審査する。採択となった部門は若手研究者の国際公募を実施する。
- ③ 参加部門において、高等研究院関係者及び外部有識者を含む体制で公正で透明性の高い審査を行い、若手研究者をテニユアトラック制教員として採用（雇用期間は5年）する。採用後は高等研究院所属となり、実際の研究教育活動は各参加部門で行う。
- ④ テニユアトラック制教員に対し、①研究費、研究スペース、設備、研究支援者等の研究環境への配慮、②テニユアトラック期間終了後のポストの確保、③学内外の研究者によるメンターの措置等、を通じて自立した研究活動が行えるように支援する。
- ⑤ テニユアトラック制教員採用後3年目に中間評価、5年間の期間終了までに通常教員への採用審査を行う。

九州大学テニユアトラック制(TT制)の概要



2011年度伊藤賞の受賞者が決定

2011年度の「伊藤賞」の受賞者に Natalia Kosolapova さん(ロシア科学アカデミー・ヨッフエ理工工学研究所及びフランスアンリ・ポアンカレ大学の博士課程)が選ばれ、平成23年10月25日(火)、応用力学研究所伊藤早苗主幹教授とともに総長室を訪れ、有川総長から同賞の授与を受けました。

「伊藤賞」(Itoh Project Prize in Plasma Turbulence)は、伊藤主幹教授の名を冠した賞で、ヨーロッパ物理学会(プラズマ物理学)に設けられ、英国物理学会(IOP)出版の共催や、九州大学の後援も受けています。

この賞は、プラズマ乱流の研究に対して優れた成果を発表した博士課程大学院生を表彰し、九州大学に招聘して講演や共同研究の機会を提供し、幅広い視野を持つ場を与えるというもので、今までの受賞者は世界各地で活躍中です。

第7回目となる今回も、世界的権威の研究者からなる国際選考委員会による選考が行われ、選考の結果、プラズ

マ乱流特性の実験的同定方法の開発および計測方法に関する理論的研究が認められたことで、Natalia Kosolapova さんが受賞者となりました。

授与式には、第4回受賞者であり、本学伊藤極限プラズマ研究連携センターで助教として活躍している Stella Odenjinger さんも参加しました。授与後の懇談は、Kosolapova さんが九大での講演報告や今後の研究ビジョンにあわせて伊藤賞の感激を語り、九州大学の国際キャリアパスの取り組みの紹介なども巡って和やかに行われました。



(左から) 有川総長、Kosolapova さん、伊藤主幹教授

世界トップレベルの最先端の研究を紹介



「最先端の科学と君たちの未来」と題した今回のシンポジウムには、福岡県内を中心にこれからの未来を担う高校生・中学生など623名が参加しました。各拠点を代表した講演者からは、最先端の研究について、時折ユーモアを混じえながら丁寧な解説があり、科学が切り拓く未来を感じさせる話も多くありました。

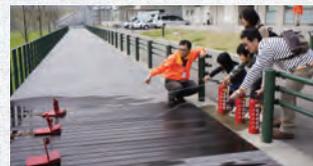
また、参加した高校生12名と6拠点の講演者とのパネルディスカッションも行われ、環境ジャーナリストの枝廣淳子氏の司会により、「環境と科学技術の関係はどうあるべきか」、「科学者になってよかったと思うことは」などについて活発な質疑応答がありました。

また、会場には6拠点の研究を紹介するブースも設けられ、高校生を中心とする多くの参加者が足をとめ、各拠点の関係者と交流するなど「最先端の科学」に触れる秋の一日を満喫する様子が見られました。



伊都祭2011を開催

平成23年11月13日(日)、伊都キャンパスセンターゾーンにて「伊都祭2011」が開催されました。伊都祭とは、九州大学と地域(福岡市西区西部6校区(周船寺・玄洋・今宿・今津・元岡・北崎)及び糸島市)が一体となり、九州大学伊都キャンパスと、それを支える地域の魅力を発信するお祭りです。昨年より、「伊都祭は春の祭り」として5月に開催していましたが、東日本大震災の発生により、今年は11月の開催となりました。



5回目を迎える今回は、いざというときには、地域と大学が団結しようという思いも込められた「地域力×大学力×防災力」をテーマの1つとして、ゲームや、デモ操作を通じて消火器やAED(自動体外式除細動器)の使い方や学べるイベントも開催されました。

ほかにも、学生・地域が主体となった研究展示や、子供向けの体験教室などのさまざまな企画、地域と大学の特色を生かした約40の露店、13の団体が日頃の練習の成果を披露するステージ企画等もあり、学生、地域の皆様合わせて約8000人が訪れ、天候に恵まれた伊都キャンパスは大いに賑わいました。次回の伊都祭は、平成24年5月13日(日)、伊都キャンパスにて「九大100年まつり」と同時開催の予定です。



ホームカミングデー2011を開催

平成23年11月19日(土)、箱崎キャンパスを会場に、今年で6回目となる「九州大学ホームカミングデー2011」が開催され、雨天にもかかわらず数多くの卒業生らが訪れました。

創立100周年にあたる本年のホームカミングデーでは、多くのイベントが行われました。創立50周年記念講堂の2階では、九大フィルハーモニー・オーケストラによるミニコンサートが行われ、1階の生協食堂では、歓迎式と懇親会が開催されました。懇親会では、有川節夫総長が歓迎の挨拶を述べ、参加者を代表して、福岡同窓会会長の芦塚日出美様は乾杯のご発声を行っていた。また、多くの卒業生が懐かしの生協メニューを楽しみながらご家族や旧友と歓談のひと時を過ごされました。



また、中央図書館や総合研究博物館で、貴重な書物や資料の展示公開が行われたほか、旧工学部本館の1階では、写真で見る「九大百年」展が開催され、創設期から近年の写真まで、100年の歴史を記録した数々の貴重な写真が展示されました。写真展会場には、先に閉校した六本松キャンパスとその周辺を再現した模型も展示され、多くの卒業生が、当時は懐かしんでおられました。午後からの伊都キャンパス案内には、卒業生、一般市民など約90名の方々が参加し、バスに乗車して、整備が進む伊都キャンパスを訪れました。伊都キャンパスでは、学生による九大祭も開催されており、施設の見学とともに、現役学生との交流も行われました。

第64回九大祭／第8回芸工祭



ステージでの多彩なパフォーマンス披露等、約200の企画が繰り広げられました。
また、ウエストゾーンでは、工府の学生が中心となって、一般の方々

平成23年11月19日(土)～20日(日)、伊都キャンパスのセンターゾーンで第64回九大祭が開催されました。今年の九大祭は、東日本大震災の被災地の方々に対して、九州からできることを考えていきたいという実行委員の思いから、「今、西からできること、今にしかできないこと。」というテーマが掲げられました。本学教員、OBによる特別講義や、学内スタンプラリー、タレントを招いてのライブの他、売上の一部を東日本大震災の支援にあてる他大学とのコラボレーショングッズの販売などもあり、大きな注目を集めました。ほかにも、学生サークルによるテント出店や教室での研究室の活動成果発表・展示、ス



せる子供たちの姿が見られました。
一方、大橋キャンパスでは、11月18日(金)～20日(日)に「第8回芸工祭」が開催されました。芸工祭は企画から演出まで芸術工学を学ぶ学生による手作りで行われています。これまでの芸工祭や地域の方々との関わり、そしてこれからの芸工祭とのつながりを大切にしたいこうという思いから、「つながり」というテーマが掲げられ、研究成果の



に機械工学の面白さを体験してもらおう「サイエンスワールド」が開催され、展示物や実験に目を輝か

展示、パフォーマンス披露が今年も多くの来場者を魅了しました。
また、最終日の夜には、高さ約20mにもなる火柱の周りを、太鼓の音に合わせて叫び踊り続けるという伝統行事「火祭り」が行われました。今年の「火祭り」は旧九州芸術工科大学時代から数えて40年目の開催で、毎年楽しみにされている地域の方々も多く集まり、学生、OBとともに会場の盛り上がりは最高潮に達しました。
会期日にはあいにく雨天の日もありましたが、今年も多くの人々に恵まれた九大秋の風物詩である九大祭と芸工祭はともに盛況のうちに無事終了しました。

九州大学の統合移転事業について

本学の伊都キャンパスの統合移転事業については、平成21年度に全学教育等の移転が完了し、第Ⅱステージが終了しました。

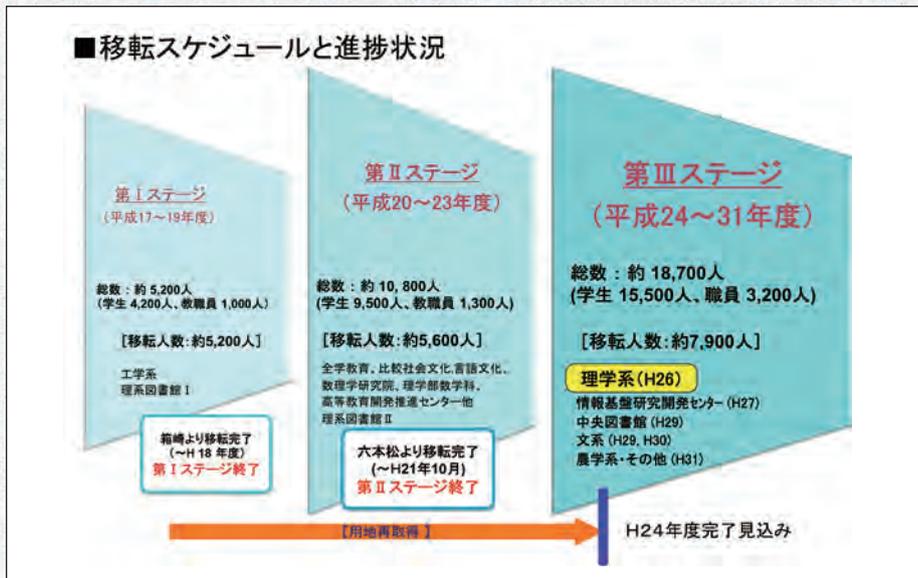
移転はこれから第Ⅲステージに入りますが、このたびの平成24年度の文部科学省の概算要求において、伊都キャンパスの未取得用地の購入費については計上されたものの、第Ⅲステージの当初に予定している理学系の施設設備費の計上が見送られることとなりました。このため、平成26年度に予定していた理学部、理学府等の移転が遅れることとなりました。

このたびの措置は、東日本大震災からの復興への対応や、箱崎キャンパス等の跡地利用の見通しが明らかになっていないことなどが主な理由とされています。

本学は今後、箱崎キャンパス等の跡地の利用計画の

具体化に向けて取り組むとともに、引き続き国に対して予算の要望を行うなど、移転の早期実現に向けて努力を続けていきます。

■移転スケジュールと進捗状況



台湾 許文龍氏

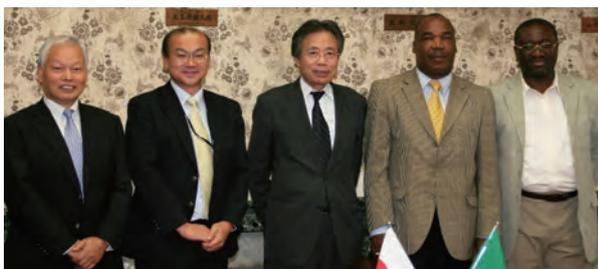
ようこそ九州大学へ

平成23年10月6日(木)、台湾の奇美実業創始者 許文龍氏ほか9名が、有川総長を表敬訪問しました。昨年3月に、本学マンドリンクラブと奇美実業マンドリンオーケストラの合同演奏会が台湾で行われ、許氏がこの演奏会で感激されたことが発端となり、本学のマンドリンクラブOBからお声かけし、今回の訪問が実現したものです。許氏は、日本と台湾の関係は地理的・歴史的にもきわめて重要で、経済や文化同様に学生の交流も密にしていくべきであること、また、何事にも理論だけでなく、実務が大事であることなどを日本語で熱心に話され、有意義な懇談が行われました。

ザンビア 大学学長

平成23年10月11日(火)、東京の国連大学で開催されるESDプログラム国際シンポジウムに出席のため来日中のザンビア大学学長ステファン・シムカンガ学長と、同大学のジェウエット・マシンジヤ博士が有川総長を表敬訪問しました。

ザンビア大学鉱山学部と本学工学部は部局間交流協定を締結しており、本学工学研究院の佐々木久郎教授が共同研究を行っています。今回の訪問では、農作物学や情報科学等の重点分野における人材育成を目的とした学術交流等について意見交換が行われました。



右から2人目がステファン・シムカンガ学長



右から6人目が許文龍氏



シェフィールド市庁舎。前の公園ではたくさんの人が余暇を楽しんでいる。



シェフィールドの街を走るトラム。

私の一番の思い出となっているのが、サークル活動のゴスペルです。歌好きな私がキリスト文化体験でもしてみようと思っただけで始めたゴスペルで

イギリス人の友達にレポートを添削してもらったり、他の国からの留学生と励まし合ったりしたおかげで乗り越えることができました。

シリアルとミルクティーの朝食をとって大学寮を出発し、時々リスが現れる通学路をのんびり歩く。授業の合間には友達と学内のカフェでお喋り。帰り道には八百屋のお兄さんとお喋りをし、寮のキッチンでイギリス人のフラットメイトと話をしながら料理をする。これが私のシェフィールドでの日常でした。このような日本の大学とは全く違った環境で、私は交換留学生として1年間を過ごしました。

したが、メンバーはとても親切で愉快な人たちばかりで、すぐに私も溶け込むことができました。週に2回の練習日に加えて、ウェディングで歌ったり、大学の近くの公園や教会でコンサートをしたりと、とても貴重な体験ができました。ゴスペルの友達は帰国した今でもコンタクトをとり続けています。



ゴスペルメンバーと結婚式が行われた教会にて

この1年で出会った友達、美しい風景、素敵な思い出。どれも日本では得ることのできない私の宝物になっています。

大学の特色

シェフィールドはイングランド中部に位置する工業都市で、人口52万人のイギリス第5位の街。鉄鋼業や刃物製品が有名。首都ロンドンやその他の街へのアクセスがよいことも魅力。たくさんの丘や川を持つ自然豊かな街で、中でも有名なのが、街の南西部に広がるヒースティストリフトという広大な国立公園。美しい景色が広がる丘陵地帯で、老若男女問わずハイキングを楽しんでいる。

街の中心部から徒歩で約15分のところにあるシェフィールド大学はイギリスでも屈指の総合大学。イギリス全土からの学生に加え、世界128カ国からの多くの留学生も有しており、学生数は約2万5千人。ヨーロッパにおける日本研究のパイオニアとしても知られており、日本研究がとて盛んな大学としても知られる。大学には囲いや門がなく、街の中にキャンパスが点在している、大学が街の中に溶け込んでいる。イギリス



シェフィールド大学のFirth Court。赤レンガ造りの趣ある建物。

交換留学について詳しく知りたい方は、「九大生のための海外留学情報」(<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/study/>)をご覧ください。過去の交換留学生による報告書も大学毎にたくさん掲載しています。

躍動

学生たちの活躍

「躍動—学生たちの活躍—」では、学生のサークル活動にスポットライトを当てて、その活動を紹介していきます。今回は、七大会の覇者 九州大学体操部の登場です。



北海道大学を主幹として開催された第50回七大会総合体育大会(七大会)。多くの九大学生が北の大地へ赴き、熱い戦いを繰り広げました。大会も終盤に差し掛かった9月、創部31年目の九州大学体操部は男子団体で初優勝を飾りました。世界体操で日本中が体操に沸いた10月。伊都キャンパスで、男子体操部主将の波多江さん(工学部3年)と、秦謙太郎さん(工学部3年)、岡本健太郎さん(理学部3年)が体操にかける想いや、七大会初優勝の喜びを語ってくれました。

—まずは体操競技について教えてください。
岡本さん 大会では通常、1人が床、あん馬、平行棒、つり輪、跳馬、鉄棒の6種目を演技します。七大会の団体戦では、1大学6人が出場し、それぞれの種目ごとの上位5人の点数が各大学の種目別の点数となり、6種目の総計で順位が決定します。

—昨年5位から大きく飛躍したということですが、去年までの違いはありましたか。
波多江さん それまで七大会の成績は最高4位でした。一昨年は7位で、去年までは「最下位にはならないように、

かつ、体操を楽しんで来よう。」という気持ちで臨んでいましたが、ここ最近では経験者の入部もあり、今年は上位を狙ってという部内の気運も高まっていました。1年くらい前から、どうすれば順位を伸ばせるのか、個人個人のウィークポイントはどこかなど、分析を行っていたのですが、4月に即戦力となる1年生が入部したことで、「これは優勝を狙えるのではないか。むしろ今年を逃すともう優勝を狙えなくなるのでは。」と思い、猛特訓を重ね、大会に臨みました。

6人全員が成功させて、幸先良くスタートがきれいました。その後も大きなミスも無く順調に進みました。部員の応援も、とても心がこもった、まとまりのある応援で、みんな一体となって戦った大会になりましたが、このような大会は入部してから初めてでした。
—実際に優勝がわかったのはいつくらいでしたか?
波多江さん 競技中は、他大学の演技をほとんど見ていなかったので、閉会式直前の本部からの速報で結果を知りました。初めて優勝を意識した中で演技



秦さん 岡本さん 波多江さん

勝はなかったと思います。
秦さん 顧問の先生もはるばる北海道まで来てくださって、とても喜んでくださいました。25、6人の北海道遠征で、移動だけでも大変だったこともありましたが、その分多くの仲間と喜びを共有できて、大きな思い出になりました。

—今回経験者で団体戦出場メンバーを回めたということですが、やはり部内では経験者が多いのですか?
岡本さん 実は8割が体操未経験で入ってきます。体操はやってみたかったけれど、高校に体操部が無かったから、単純に勧誘されて楽しそうだから、理由は様々です。自分も初心者で入部したんですが、最初は何もできない状態で、毎日が筋肉痛の連続で、手の皮がむけることも日常茶飯事でした。

ただ、そうやって練習を積み重ね、身体と頭が慣れてきたところでコツをつかむと技が決まるようになります。自分が目標としている技が決まると、言い表せないほど嬉しいんですよ。だから練習がキツイと思うときもありませんが、体操がやめられません。

—さすが優勝校だけあって、厳しい練習を重ねているのを見えますか。
波多江さん 大会に出るからには理想通りの技を決めて勝ちたいという



強い気持ちがありますので、厳しい練習も取り入れます。ただ、肉体的な厳しさを追及することも重要ですが、つつい甘いが出てくる中で自分に打ち勝つことができる強い精神力を身につけることを重視しています。大学では高校以上に自主性を持つことが大事だと思います。
秦さん 上手い人の演技を見て勉強したり、自分の演技を録画して見るなど、自分を伸ばす方法をいろいろと模索しています。また、部員同志教え合って、切磋琢磨していますから、部員同志の結束はとても強く、仲のいい部活ですよ。練習はもちろん、それ以外のレ



クレイションも盛んです。ハロウィンではみんなで仮装して天神に出るのが、伝統になっていて、大会並みに張り切って準備してしまいました(笑)

—来年の七大会は九大主幹での開催です。プレッシャーのかかる大会となりそうですが、最後に今後の抱負と、これを読んでいる未来の九大学生へメッセージをお願いします!!



波多江さん 今回の優勝でマークされることになると思いますし、ホームでの開催ということで確かにプレッシャーに感じることはありますが、根幹にある「体操が好き」という気持ちを前面に大会に臨みたいですね。そして応援してくれる周りのみんなに感謝しながら鍛錬を重ねて初の連覇に備えます。実は今年が東京大学が出場しなかったため、6大学中の1位だったんです。来年こそは真正正銘七大会、七大学中の1位を目指します。
岡本さん 体操部のおかげで、生活の中で熱中できる楽しみができ、充実した毎日を送っています。もちろん学生である以上、勉強が本分だと思いますが、部活は机上では学べないことをたくさん得られます。学部が違う友達もたくさんできますし、合宿や大会で同じ目標に向かう仲間が全国にたくさんいますよ。充実した学生生活を送りたいなら是非体操部へ!! Webサイトも見てくださいね!!

平成23年 8月

がん抑制遺伝子 制御分子を発見
鈴木聡 生体防御医学研究所教授
(白紙・読売朝日・沖縄タイムス・佐賀・山口
8/12・22)

糖尿病合併症改善薬 微小カプセルで投与
九大など副作用少なく
江頭健輔 医学研究院教授
(白紙 8/1)

@九大研究室「ゲスト講師」に感謝
溝越明 寄附講座教授
(西日本 8/1)

朝日新聞提言論文 最優秀賞に
佐藤俊郎氏(芸工大卒)
(朝日 8/1)

環境配慮型の宅地開発 大建、九州大と提携
(白紙 8/3)

未来を拓く 九大風レンズ風車
実証実験
(大分合同 8/4)

高血糖 高まるがんリスク 九州大グループが研究
平川洋一郎医師ら
(読売 8/4)

100年前の絵はがき展 総合研究博物館
(佐賀・西日本 8/4・5)

「教育往復書簡(連載)」
井口潔 名誉教授
(産経 8/5・12・19)

9月

〈連載〉ゼミナール エネルギーと技術
古山通久 稲盛フロンティア研究センター教授
(白紙 9/1・13)

九大病院がセンター開設 睡眠時無呼吸症候群治療
(読売 9/17)

海峡圏の成長戦略探る 福岡で釜山フォーラム
福岡側メンバーに有川節夫 総長
(西日本 9/16)

黄砂影響検討委員会 市民への情報提供の方法探る
九大など
(毎日 9/1)

「造血幹細胞」動き維持する物質確認
中山敬一 生体防御医学研究所主幹教授
(西日本・高崎日刊・山口・読売 9/25・7)

九大大学院教授が医学的立場で証言
カネミ油症訴訟
古江増隆 医学研究院教授
(西日本・朝日 9/26)

世界にガウディの知恵を
外尾悦郎 客員教授
(毎日 9/2)

野田内閣 郵政改革 金融大臣に自見庄三郎氏(九大卒)
(朝日 9/12・31)

日田のまちづくり古民家から発信
藤原恵洋 芸術工学研究院教授
(西日本 9/3)

快走70代の若大将 東忠節さん
九大ヨット部OB
(西日本 9/3)

食を大事に、人生変えよう 青春小説「自炊男子」に込めた思いは?
佐藤剛史 農学研究院助教
(西日本 8/5)

細菌で塩害土壌再生を 九州大で研究
大嶺聖 工学研究院准教授
(毎日・西日本 8/5・9/1)

文「舞」両道輝く汗
体操部 古屋繁一さん
(西日本 8/6)

小中学生、化石レプリカ作り「九大・糸島会」
(読売 8/6)

箱崎に眠る「知の宝庫」 九大総合研究博物館
(西日本 8/6)

法教育通じ対話力育む
春田久美子さん(九大卒)
(朝日 8/7)

九大ソーシャルビジネス 利潤で社会貢献
(読売・西日本 8/7・8)

日本の大学の魅力、台湾にPR
九大など
(西日本 8/8)

iPS細胞経年変化 九大グループ「EG細胞」鈴木淳史
生体防御医学研究所准教授
(読売 8/8)

球団史に見る地域経済 九大生
西鉄ライオンズ研究
(朝日 8/9)

原発政策見直し 核廃絶求め集会
森茂康 名誉教授
(西日本 9/4)

@九大研究室 多くの人がかかわる力
武井良範 寄附講座准教授
(西日本 9/5)

日本技術士会会長に就任
内村好氏(九大卒)
(西日本 9/5)

伸び悩む留学生採用 九州経産局が就業体験
顧曉璿さん
(西日本 9/6)

蛍光管からレアアース 県など全国初の回収事業
九大など
平島剛 工学研究院教授ら
(毎日・白紙・朝日・朝日・読売・日経・産経・日経産経 毎日・大分合同・佐賀 9/6・7)

軍医から見た戦争の全体像
帯木蓬生氏(九大卒)
(読売 9/7)

青、緑、赤で感知のタンパク質を開発
石原健 理学研究院教授ら
(西日本・日経産経 9/9・15・16)

争点論考 大学の秋入学を考える
丸野俊一 副学長
(西日本 9/9)

空き家再生プロジェクト 九大院生提案、市も支援
(毎日・西日本・読売 9/9・13・20)

新司法試験 合格率23% 九州大23位
(朝日 9/9)

内科医が手記出版 病状と半生記
録 川崎晃一 名誉教授
(西日本 9/9)

〈連載〉聞き書きシリーズ 一鳥万宝
古野隆雄氏(九大卒)
(西日本 8/9・10/14)

九大芸術工学研究院長に石村真一教授が再任
(西日本 8/10)

抗がん剤の効果 判定1〜2時間
小名俊博 農学研究院准教授
(日経産経 8/11)

「福ぶら」が道案内 福岡市、九大、ゲーム会社制作 無料アプリ
(毎日 8/12)

去りゆく九大 将来像どう描く
東区・箱崎地区新たな魅力創出へ
(西日本 8/13・18)

福岡の近現代建築を解説 人気ツアラー 今夏で幕引き
九大旧工学部本館など
(日経 8/13)

大学「秋入学」九州は様子見
九大
今の制度で十分対応
(西日本 8/17)

九大・釜山大が教育プログラム
国際人育成に日韓連携
(西日本・日経 8/17・9/8)

九大転出進む東区箱崎で討論
まちづくりの好機に
(西日本 8/18)

九大跡地に 少年科学館を 九大
六本松跡地
(西日本 毎日 8/18・20)

福岡市産学センター増設計画
部屋面積倍 13年度開設
(西日本 9/10)

白金使わぬ燃料電池 九大、安価な触媒で開発
小江誠司 工学研究院教授
(日経・朝日・読売・産経・日経産経・西日本・日刊工業新聞 9/13・16/19)

「時評」隣人への微妙な距離感
松本常彦 比較社会文化研究院教授
(読売 9/13)

九大混声など5団体全国へ 九州合唱コン
(朝日 9/13)

目の加齢黄斑 関係遺伝子
九大
グループ発見 治療に光
石橋達朗 医学研究院教授ら
(朝日・産経・西日本・科学 9/13・30)

九大 港湾環境や防犯探る 産学官6者で共同研究
(西日本 9/13)

農作業軽減、糖度高く 新種ブドウ
九大が開発
(日経・朝日・西日本・宮崎日刊・南日本・産経・読売 毎日 9/14・15)

九大と鹿島市は連携協定締結へ
地域づくりなどで協力
(西日本・読売・朝日・佐賀 9/14・15・27)

九大が新組織「基幹教育院」
(朝日 9/14)

医再発見 女性の離職防止策が必要
県産婦人科医学会会長 片瀬高氏
(九大卒)朝日 9/14

仏教研究者94歳 田村圓澄 名誉教授が新著
(西日本 9/15)

カネミ油性 九大が研究成果
古江増隆 医学研究院教授
(読売 8/19)

アジア戦略 学生が指南「アジアビジネスプランコンベンション」に各大学から学生が参加
(朝日 8/19)

中国産オオクワガタ 相知町で発見
「交雑進めば、佐賀産危険」専門家警鐘
荒谷邦雄 比較社会文化研究院教授
(佐賀 8/19)

今年創業1000年は46社「長寿企業」九州大売上高1位
(西日本・産経 8/20・9/1)

九大、研究施設を新設 次世代燃料電池 産学で連携
(日経 8/23)

黄砂など大気中の微粒子の影響調査
鶴野伊津志 応用力学研究所教授ら委員に
(毎日 8/23)

欧州の福祉先進国 日本の技術に学ぼう
福岡の企業と九州大が高齢者向けソフト
(西日本 8/24)

つり橋式 空中で太陽光発電 九大など研究
太田俊昭 名誉教授、島谷幸宏 工学研究院教授
(毎日・朝日・日経産経 読売 8/24・9/27)

福岡市美術館を核に 2公園の未来像を研究
3カ国の学生ら
(西日本 8/24)

高原淳 主幹教授に産学官連携功労者表彰
(西日本 9/17)

分権応援 発言堂々と 蔵内勇夫
九州の自立を考える会会長(九大卒)
(朝日 9/18)

体内の鉄量、調整する酵素 中山敬一
生体防御医学研究所主幹教授
(西日本・産経 9/19)

王たちの処遇を史料で探る 「天皇の韓国併合」を出版
新城道彦 韓国研究センター助教
(西日本 9/19)

歴の使用 国内最古例 福岡元岡群から出土
坂上康俊 人文科学研究院教授
(読売・朝日・佐賀・山口・西日本・毎日・産経・西日本 9/21・22・27)

高出力発電 実証実験へ「風レンズ」
風車の可能性は
大屋裕二 応用力学研究所教授
(西日本 9/23)

マウス培養細胞で麻疹ウイルスを効率よく増殖
柳雄介 医学研究院教授
(科学 9/23)

独自無線技術で低コスト 地下街全域をWi-Fi化
九大など社会連携事業
(科学 9/23)

駅ビルに九大教室 社会人に好評
経済拠点新ビジネスも
(読売 9/24)

病院のピエロお家に 九州大「福岡子どもホスピスプロジェクト」の二環
(西日本 9/24)

屋台研究 大学院留学生ウエルズさん講演
(西日本 毎日・読売 8/24・25・26・31)

九州野菜便ピンチ
知足美加子 芸術工学研究院助教
(読売 8/24)

独ノール賞受賞者会議 日本代表に生体防御医学研究所博士課程の細田将太郎さん
(琉球 8/24)

孫文紀行8 隣国の同志 歓迎の舞台
九州帝大と常盤館
(西日本 8/24)

リーダーたちの本棚 住友生命保険社長 佐藤義雄氏(九大卒)
(朝日 8/25)

卵子の分裂停止 メカニズム解明
佐方功幸 理学研究院教授ら九大グループ 不妊治療に期待
(読売・西日本・日経産経 8/29・31・9/2)

夢を具現化 非日常へ誘う
八谷和彦氏(芸工大卒)
(熊本日日 8/29)

ヒーリングタウンささぐり 九大演習林 解放された学びの森
(西日本 8/31)

医再発見 女性が働きやすく改善を
榑木晶子 医学研究院教授
(朝日 8/31)

日本の大学、北京で安全アピール
九州大など
(熊本日日・西日本・佐賀 9/25)

太陽の黒点少ない時期 巨大地震頻発九州大宙空環境研が分析
(毎日 9/26)

福島第一原発事故 原子力優遇見直しを 吉岡斉 副学長
(毎日 9/27)

教育 こころの森を歩く
南博文 人間環境学研究院教授
(西日本 9/27)

糸島市地域活性化プランコンテント
大学生が活性化プラン
(毎日 9/27)

医再発見 法施行「行進国」から脱却へ
福岡腎臓内科クリニック院長 藤見惺氏(九大卒)
(朝日 9/28)

叙位叙勲 正四位 磯矢彰 名誉教授
(読売 9/28)

秋の園遊会招待者
中野三敏 名誉教授
(読売・朝日 9/29)

糸島市 食品加工研究センター新設
農協や九大、メーカー連携
(西日本 9/29)

九大がプロジェクト 文理の枠超え
震災研究 吉岡斉 副学長が講演
(西日本 9/30)

平成 23 年度九州大学研究活動表彰 受賞者一覧

研究又は産学官連携活動に関し本学の研究の活性化と財務上の貢献が特に顕著な教員を、平成23年11月1日に表彰しました。

1	人文科学研究院	教授	久保 智之	62	システム情報科学研究院	教授	古川 浩
2	比較社会文化研究院	教授	小山内 康人	63	システム情報科学研究院	教授	安浦 寛人
3	人間環境学研究院	教授	八尾坂 修	64	システム情報科学研究院	教授	吉田 啓二
4	理学研究院	教授	射場 厚	65	システム情報科学研究院	准教授	井上 弘士
5	理学研究院	主幹教授	島崎 研一郎	66	システム情報科学研究院	准教授	岩熊 成卓
6	理学研究院	主幹教授	下東 康幸	67	システム情報科学研究院	准教授	濱屋 宏平
7	理学研究院	主幹教授	藤木 幸夫	68	システム情報科学研究院	准教授	藤崎 清孝
8	理学研究院	主幹教授	矢原 徹一	69	システム情報科学研究院	准教授	松永 裕介
9	医学研究院	主幹教授	赤司 浩一	70	総合理工学研究院	教授	青木 百合子
10	医学研究院	教授	石橋 達朗	71	総合理工学研究院	教授	小山 繁
11	医学研究院	教授	岩本 幸英	72	総合理工学研究院	教授	笹田 一郎
12	医学研究院	教授	江頭 健輔	73	総合理工学研究院	教授	濱本 貴一
13	医学研究院	教授	大木 研一	74	総合理工学研究院	准教授	堤井 君元
14	医学研究院	教授	清原 裕	75	農学研究院	教授	石野 良純
15	医学研究院	教授	吉良 潤一	76	農学研究院	教授	伊東 信
16	医学研究院	主幹教授	砂川 賢二	77	農学研究院	教授	大島 敏久
17	医学研究院	教授	住本 英樹	78	農学研究院	教授	日下部 宜宏
18	医学研究院	主幹教授	中西 洋一	79	農学研究院	教授	久原 哲
19	医学研究院	教授	橋爪 誠	80	農学研究院	教授	佐藤 光
20	医学研究院	教授	原 寿郎	81	農学研究院	教授	白畑 實隆
21	医学研究院	教授	古江 増隆	82	農学研究院	教授	園元 謙二
22	医学研究院	教授	目野 主税	83	農学研究院	教授	竹川 薫
23	医学研究院	主幹教授	諸橋 憲一郎	84	農学研究院	教授	南石 晃明
24	医学研究院	主幹教授	横溝 岳彦	85	農学研究院	教授	松岡 健
25	医学研究院	教授	吉田 眞一	86	農学研究院	教授	吉国 通庸
26	医学研究院	主幹教授	和氣 徳夫	87	農学研究院	教授	吉村 淳
27	医学研究院	准教授	掛地 吉弘	88	農学研究院	准教授	北岡 卓也
28	医学研究院	准教授	松田 秀一	89	農学研究院	准教授	立花 宏文
29	薬学研究院	主幹教授	井上 和秀	90	農学研究院	准教授	花井 泰三
30	薬学研究院	教授	大嶋 孝志	91	生体防御医学研究所	教授	神田 大輔
31	薬学研究院	主幹教授	佐々木 茂貴	92	生体防御医学研究所	教授	谷 憲三朗
32	薬学研究院	准教授	田中 宏幸	93	生体防御医学研究所	主幹教授	中別府 雄作
33	薬学研究院	准教授	津田 誠	94	生体防御医学研究所	主幹教授	中山 敬一
34	薬学研究院	准教授	西田 基宏	95	生体防御医学研究所	主幹教授	福井 宣規
35	薬学研究院	准教授	濱瀬 健司	96	生体防御医学研究所	教授	山崎 晶
36	薬学研究院	助教	安川 圭司	97	生体防御医学研究所	准教授	稲葉 謙次
37	工学研究院	主幹教授	安達 千波矢	98	生体防御医学研究所	准教授	鈴木 淳史
38	工学研究院	教授	石原 達己	99	生体防御医学研究所	准教授	東田 裕一
39	工学研究院	教授	小江 誠司	100	応用力学研究所	主幹教授	伊藤 早苗
40	工学研究院	教授	神谷 典穂	101	応用力学研究所	教授	柿本 浩一
41	工学研究院	主幹教授	君塚 信夫	102	応用力学研究所	准教授	寒川 義裕
42	工学研究院	教授	後藤 雅宏	103	応用力学研究所	准教授	竹村 俊彦
43	工学研究院	主幹教授	佐々木 一成	104	先導物質化学研究所	教授	菊池 裕嗣
44	工学研究院	教授	笹木 圭子	105	先導物質化学研究所	主幹教授	高原 淳
45	工学研究院	教授	島谷 幸宏	106	先導物質化学研究所	主幹教授	永島 英夫
46	工学研究院	教授	高松 洋	107	先導物質化学研究所	教授	林 潤一郎
47	工学研究院	教授	田中 敬二	108	先導物質化学研究所	教授	丸山 厚
48	工学研究院	教授	土肥 俊郎	109	先導物質化学研究所	教授	YOON SEONG HO
49	工学研究院	教授	中嶋 直敏	110	先導物質化学研究所	教授	横山 士吉
50	工学研究院	主幹教授	堀田 善治	111	先導物質化学研究所	准教授	吾郷 浩樹
51	工学研究院	教授	松岡 三郎	112	先導物質化学研究所	准教授	大塚 英幸
52	工学研究院	准教授	伊田 進太郎	113	先導物質化学研究所	准教授	岡田 重人
53	工学研究院	准教授	木田 勝之	114	先導物質化学研究所	准教授	藤田 克彦
54	工学研究院	准教授	後藤 浩二	115	マス・フォア・インダストリ研究所	主幹教授	若山 正人
55	芸術工学研究院	准教授	尾本 章	116	病院	准教授	中島 直樹
56	芸術工学研究院	講師	松隈 浩之	117	病院	准教授	三森 功士
57	システム情報科学研究院	教授	木須 隆暢	118	産学連携センター	教授	中島 寛
58	システム情報科学研究院	主幹教授	白谷 正治	119	産学連携センター	教授	古川 勝彦
59	システム情報科学研究院	教授	合田 忠弘	120	稲盛フロンティア研究センター	教授	木村 崇
60	システム情報科学研究院	主幹教授	都甲 潔	121	稲盛フロンティア研究センター	教授	山東 信介
61	システム情報科学研究院	教授	福田 晃	122	稲盛フロンティア研究センター	教授	松本 広重

告知板

東京・関西賀詞交歓会のお知らせ

学部を超えて九州大学同窓生が集う場として、次の日程にて賀詞交歓会を開催します。東京、大阪近郊にお住まいの多くの皆様のご来場をお待ちしています。

九州大学東京同窓会賀詞交歓会

日時 平成24年1月25日(水)
18:30～ 受付開始
18:45～ 総会
19:00～ 懇親会

場所 学士会館 210号室
(東京都千代田区神田錦町3-28)

連絡先 九州大学東京同窓会事務局(学士会館内)
TEL/FAX:03-5283-8510
E-mail:kyudaitokyo@gmail.com

九州大学関西同窓会賀詞交歓会

日時 平成24年1月23日(月)
17:10～ 開場
17:30～
講演会「漢字で日本語を書く一万葉仮名の世界」
高山倫明 九州大学大学院人文科学研究院教授
18:30～ 懇親会

場所 ハートンホテル北梅田 2階「あさぎ」
(大阪市北区豊崎3-12-10)

連絡先 九州大学関西同窓会事務局
(九州大学大阪オフィス内)
TEL:06-4797-6280
FAX:06-4797-6281
E-mail:doso-kansai@jimu.kyushu-u.ac.jp

九州大学男声合唱団 コールアカデミー 第56回定期演奏会のお知らせ

日時 平成24年1月21日(土)
18:00～開演 (17:30開場)

場所 アクロス福岡シンフォニーホール
(福岡市中央区天神)

Webサイト <http://www.chor-academie.net/>

編集後記

2010年5月1日付けで東北大学大学院理学研究科より応用力学研究所に赴任してきました。衛星に搭載したレーダやライダーを用いて雲・エアロゾルの物理特性と気候システムの関係について研究しています。夏に筑紫キャンパスで公開講座を行いました。人生の諸先輩の参加者も多く、また質問がものすごく活発であったことに感銘を受けました。知的好奇心を常に持ち続ける姿勢はすばらしいものだと思います。そのようなことも研究指導や授業を通して伝えていきたいと思っています。

編集委員 応用力学研究所 教授 岡本創

先日、震災支援のために仮設住宅地に設置した集会施設「みんなの家」の落成式に参加した。これは、建築家の伊東豊雄氏が発案し、それを我々建築関係者や学生など多くの人の力を合わせてできたものだ。仮設住宅で暮らす人々は本当に辛い経験をしてきたのだが、このときには皆さんの表情も明るく、ものを作るといふイベントや暖かみのある空間が彼らに元気を与えたことを実感した。人間が本来持っている前を向いて生きる力の強さに希望を見た。

編集委員 人間環境学研究院 准教授 末廣香織

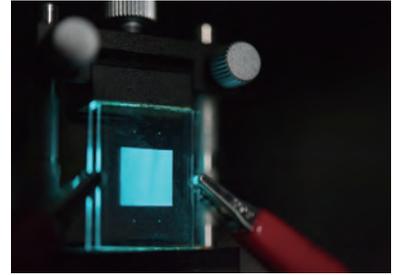
九大の最新情報は「九大広報」の定期購読で。

九州大学同窓会連合会では、九州大学の姿をご理解いただくため、同窓生や在学生の家族の皆様をはじめ、広く一般の方々にも「九大広報」の定期購読をお願いしています。定期購読は年間六巻分(隔月発行)三千円でお受けいただけます。事務局までご連絡をお願いします。

九州大学同窓会連合会事務局

TEL.092-642-4328 FAX.092-642-2787
E-Mail sycdo-rengo@jimu.kyushu-u.ac.jp

最先端有機光
エレクトロニクス
研究棟



平成23年10月に伊都キャンパスに完成した次世代有機エレクトロ・ルミネッセンス(有機EL)の研究開発拠点です。最新の設備を備えた実験室やクリーンルーム等を有する3階建て、総面積2,400m²の建物では、九州大学をはじめとした約70名の研究スタッフが一堂に集まり、最先端の研究開発を行っています。

また、研究棟には、研究者の交流スペース、一般の方も利用できるカフェも備えているほか、ロビーには直径2メートルの円筒形の有機ELディスプレイを展示しており、今後、センターでの研究成果もこのディスプレイに導入していきます。